ヲ 9
4109
1

古今茶道全書叙

今古嗜茶底避世之浮華貴質之素朴是實風流一等抜俗之流也震旦扶桑其人其多矣陸羽三篇盧仝茶歌是異朝著者也如本朝建仁千光國師

42 8583

ヲ 9
4109
1

昭和12年12月13日寄
和田大作氏贈

入宋得茶皈朝　明慧上人種茶實於栂尾其所種之深瀬等園名至今存矣又宇治之茶者將軍義滿公所令大内氏某植也緇素貴賤雖嗜之多世亂相續多不究其蘊厥後聚樂法印紹鷗利休古田氏小堀氏細川氏片桐氏等其流多人也今集諸家秘奥鏤梓爲知斯樂者也醜拙亦多所謂憐兒者乎

旹

元禄六秊仲秋日

洛南紅染山鹿庵子謾叙

永昌坊書肆習成軒刊行

一此書者年始之茶の湯より発端ゟ終る茶園寺院座敷釣棚窓之花立花勿論囲小花生の手段之間書院二ノ間之花臺子の釜不審菴臺目莊り茶二臺子光屛風の仕立様迄式法并手織縁富之流書出し自古茶人茶道宗匠名人之掟式南坊に分記置り又之外之盆點臺茶碗水指の揃爐の灰同炭風爐の灰同炭四畳半三畳大目二畳大目一畳半大目小及臺永板當古出爐角爐太鼓子左勝手臺子の灰炭の揃點様客振亭主方の式法并路地入路地迄之作法路地庭山水の寫式様掛一花り数奇屋書院寫路地まで

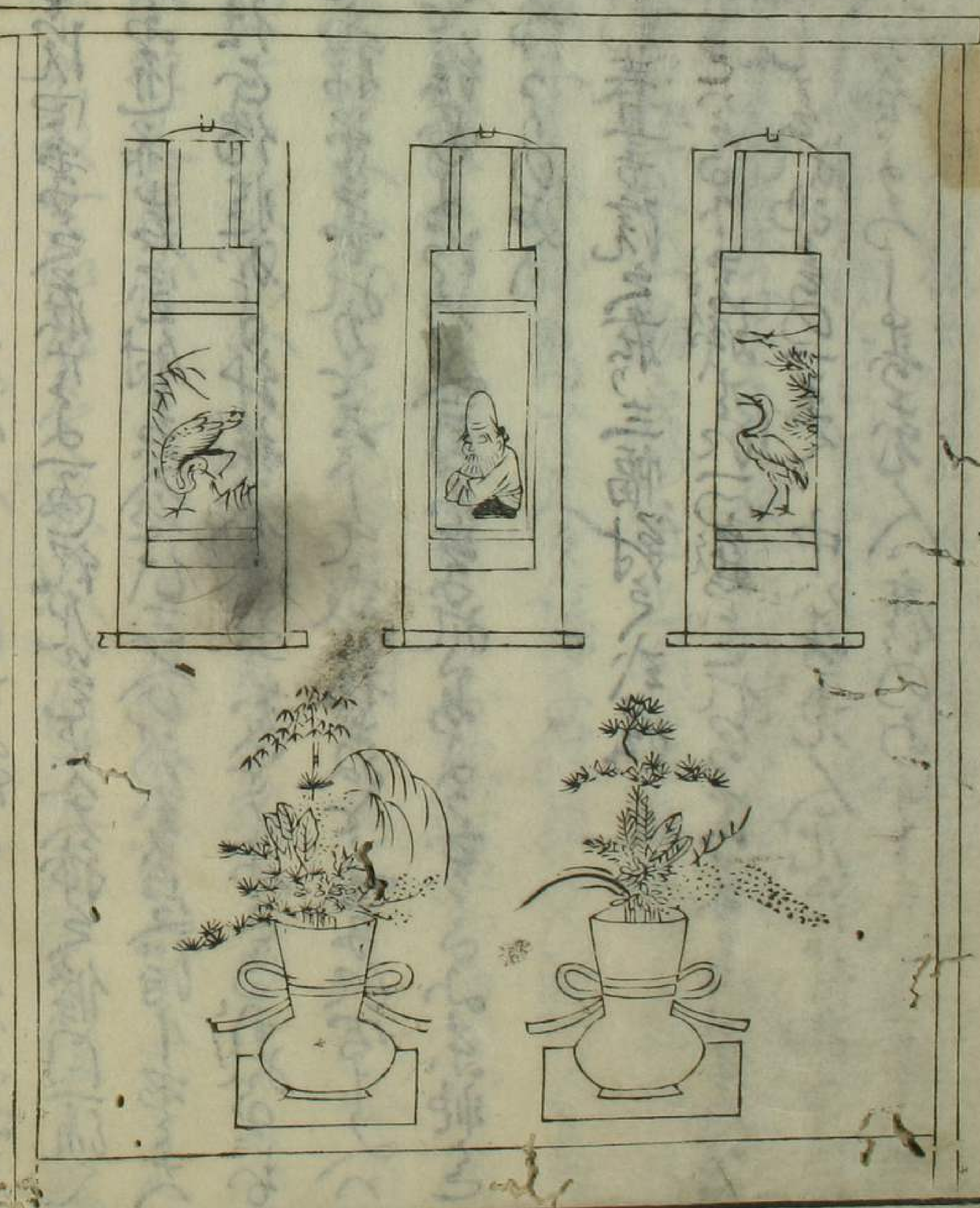
刀懸より茶席の構へ并に飾り炉擢石迄石燈籠
挙火燵炉又紙窓掛物口切式法一切の器ハ不及僧家迄
茶会料理并茶菓子ニ至ル迄懸物掛物の表具又ハ其式ニ付
根元之仕立荘様一事一物も漏さず記上数寄屋大工之秘事ニ
細工人の習事座敷萬寸尺の様子又障子の数々迄
委細古人の式法を以吟味修錬し茶湯嗜顧不残く
態と今世に行古抛の取りあはせを考して畧ニ
記し且年中心得ともに人の見て得心茶道画鑑に写し以て
後のなどみ文言不学の人もよく解得て是をたのしみ
せしむるものなり数寄屋及小間様大概爰ニ于茲
條目を以て可察知也

年始飾并書院数寄屋并二之間不残之ろ座子不残
之事付り 書院四季之荘り方一通り飾花生其外之條目一流之
余昔日安宗茶道并岩宮尉為ニ伝ひ三人の行義受得し而て大
人の荘物見て仕立傳性をも計指挙（ひゃいわけ）すべき義をも是皆書見其中ニお
いては秘事をも露ず是書見力を尽して或ハ指数を数字にて写し又ハ
京の説損捐と結畧よりして文言不学の人もよく解らしむる為小未然を
茶道の全と備るものなり

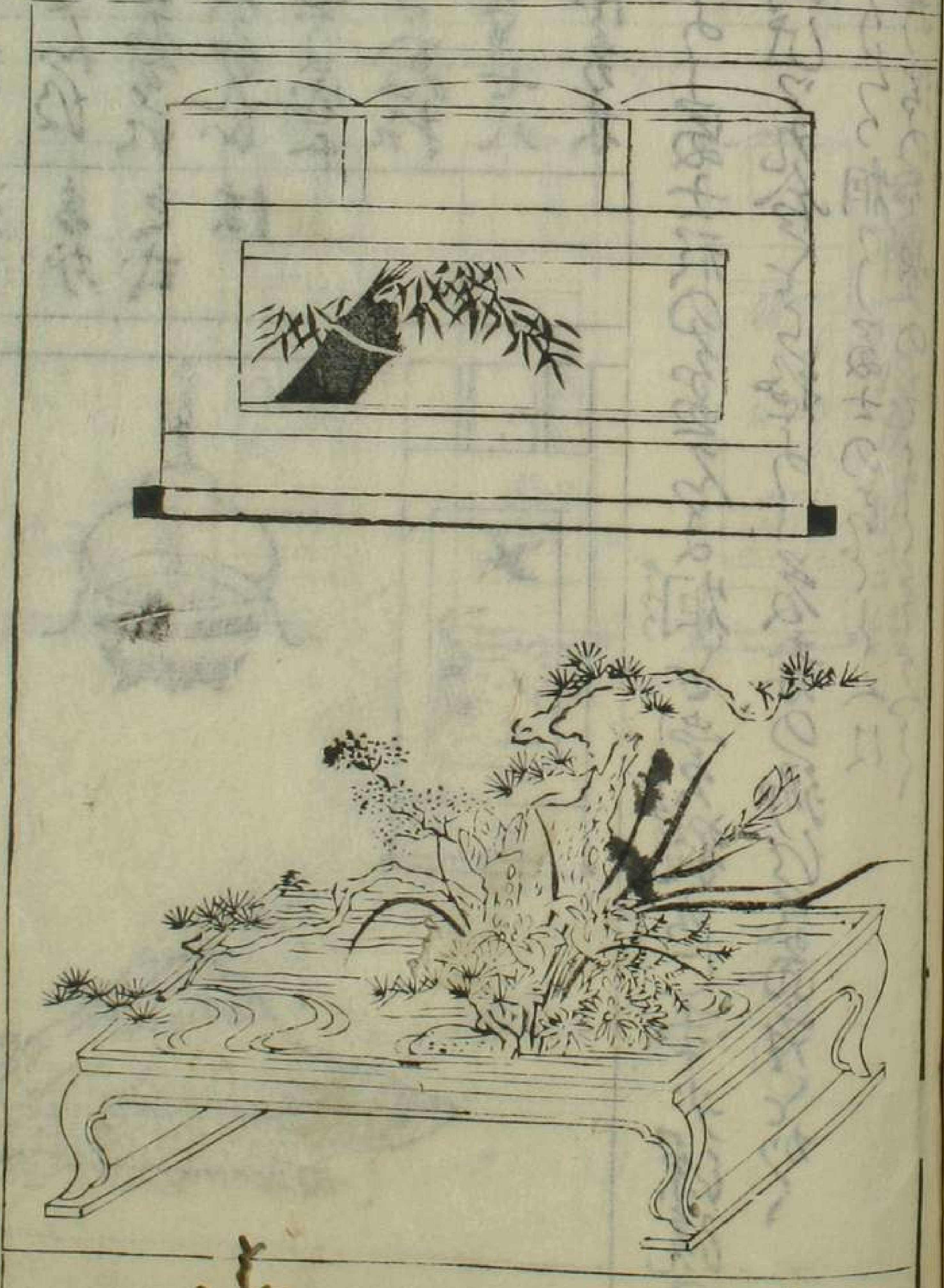
新春書院之荘り三幅對之式法

年始行事始めハ当る下書院（さゞん）ニ而一幅を掛（え）い是を見て書院の荘りを
床の間の飾をも記し地袋の上ニ是之　中ハ寿老人左右ハ生物をかざるハ
飾るこ一入よき合よろしき寿老人ハ鹿の画にて皆もらい盆華二瓶
松竹之事

大横物砂之物見合

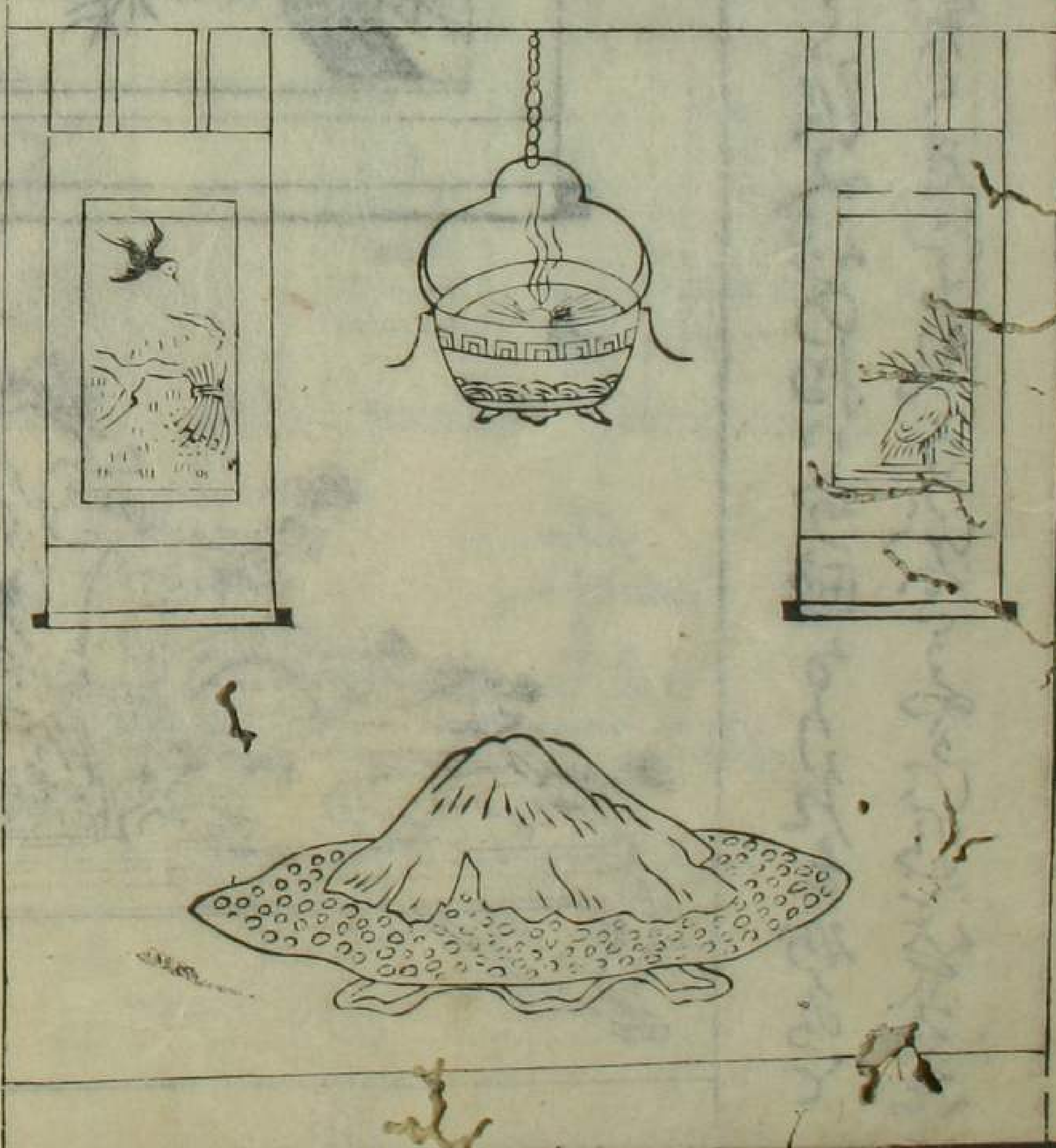


一 茂半の画
座敷を寛き
風とともに数寄
氣を掛る所に
砂の物なども
上を盛りの大
絵ものは小風なる
対幅に大横物
小かけ絵も
二本たけ須如き風よりとり又砂の物は前略なりたる砂なと
当て掛置きて掛物を宗として大なる砂の物を此やうに飾ると定まる



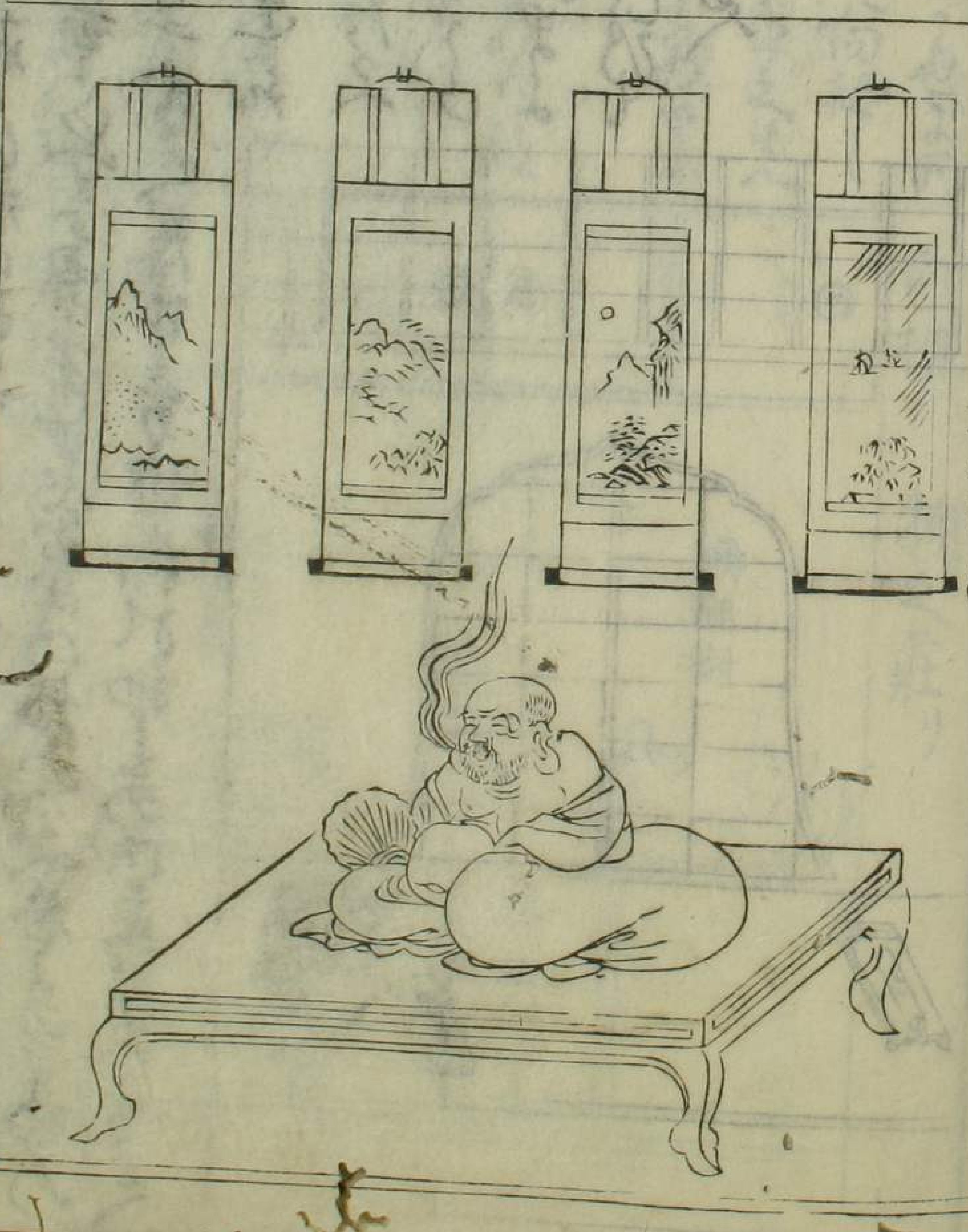
のぶ法ゆへて古人定め
れしところゆへ理
なきことなれど式法
なれバ用ゆるなり
一釣香炉ハ盆石の事ハ
九合ぐらゐに火をいけ灰
猶ぎく銀葉に穴三
ツあけいけ火をさし入れ
にて伽羅（きやら）香を七八
匁計三分長四方木
ハ撰ようみせてより富士形の盆石に銅と霊籠あし光源院の
御寺殿の時代ハ九合ぐらゐ焼よし義教の卿にて当在とかく
かほりもの銅ハ富士の如くしては
新規のり様のそよしとすべく

二幅對釣香炉之式法



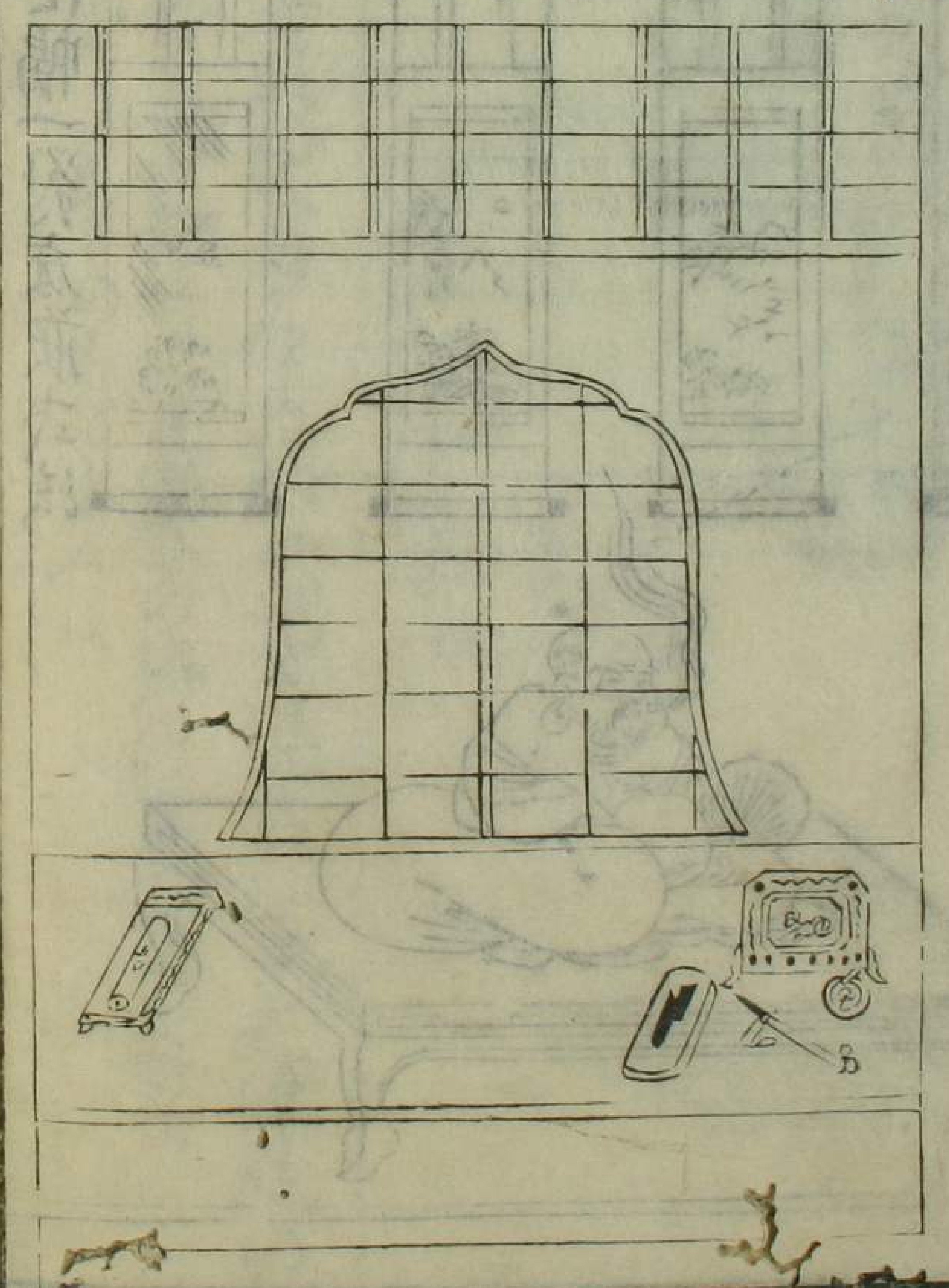
一四幅物ハ卓にも
大横物のあひら
いの物ハ平卓香卓
を取合香炉も
ありものは卓
もひとつ朱ぬり書
き貝大撰れ（やう）物を
置べし平卓の時
ハ香炉三のひさ
ろを取合すべし
一香炉の灰ハぐんと
をあけいれぎくと
ちへ銀葉とを
伽羅香并ニ長三分ハ四方木ハ横に置べし結盤下ニ座づきへ穴三ツ明ばかん

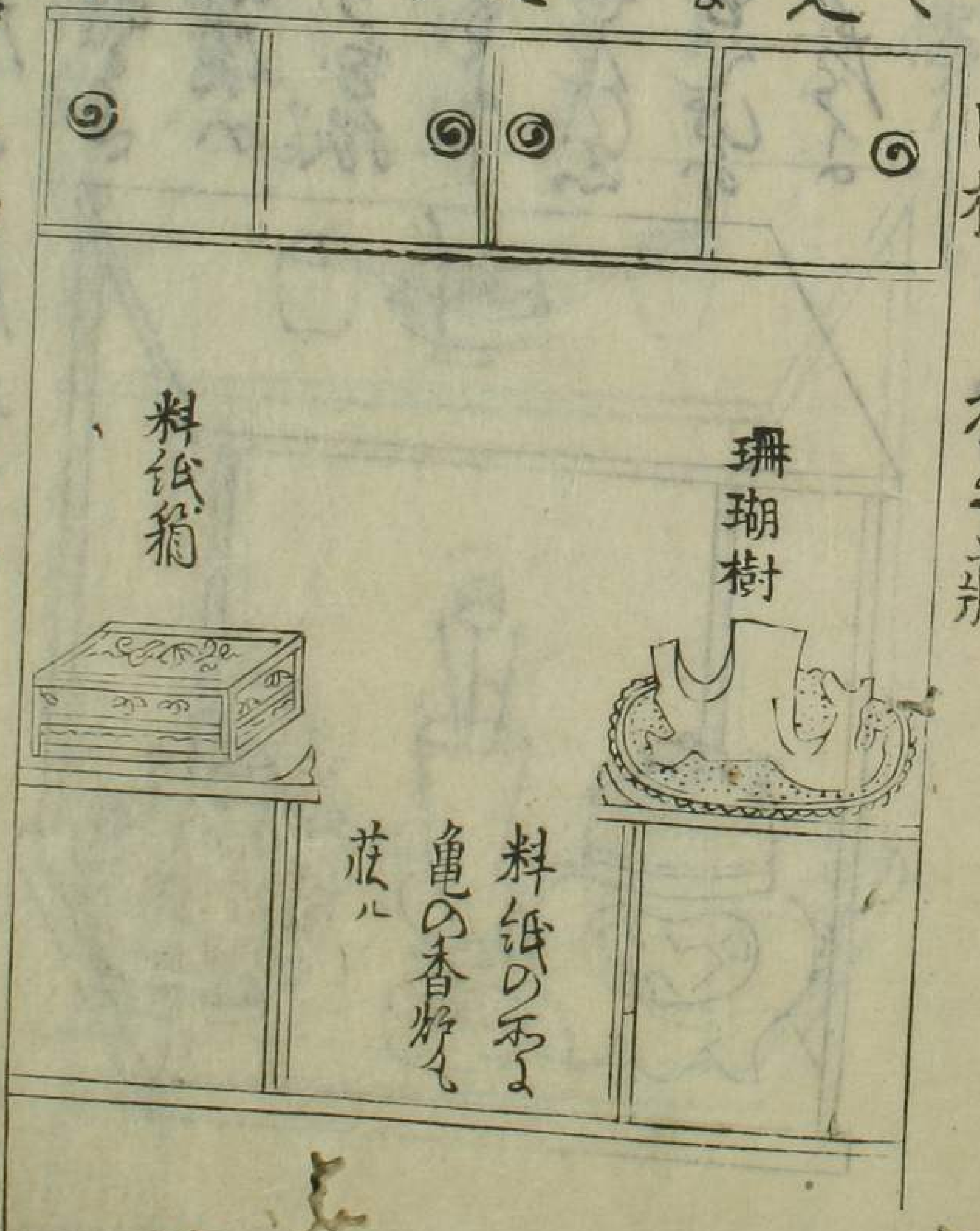
四幅一對床荘式法



付書院荘り

一或硯に筆架の荘りは柳の枝の下に経冊紙などを上ヶ置て香炉香合
引て出の筆よ乗とも宋安宗の通ゟ宮氏の傍ふ小文庫よの世棚の
香合にハ筆に依りて荘るべし硯中に方傍棚は細きもの付荘りよハゐるべし
宗当は硯の手ゟ是れ
書くのよき硯たるべし
しかりとあらずとも
大事の荘りれハよ
いよいよかくし出ても
荘よるべき也





一此棚ハ向ひあるをよ同
板よ板をつけて向板とく
云板の前にはならぬ之是
れ硯箱れ荘りよおるよ
るし

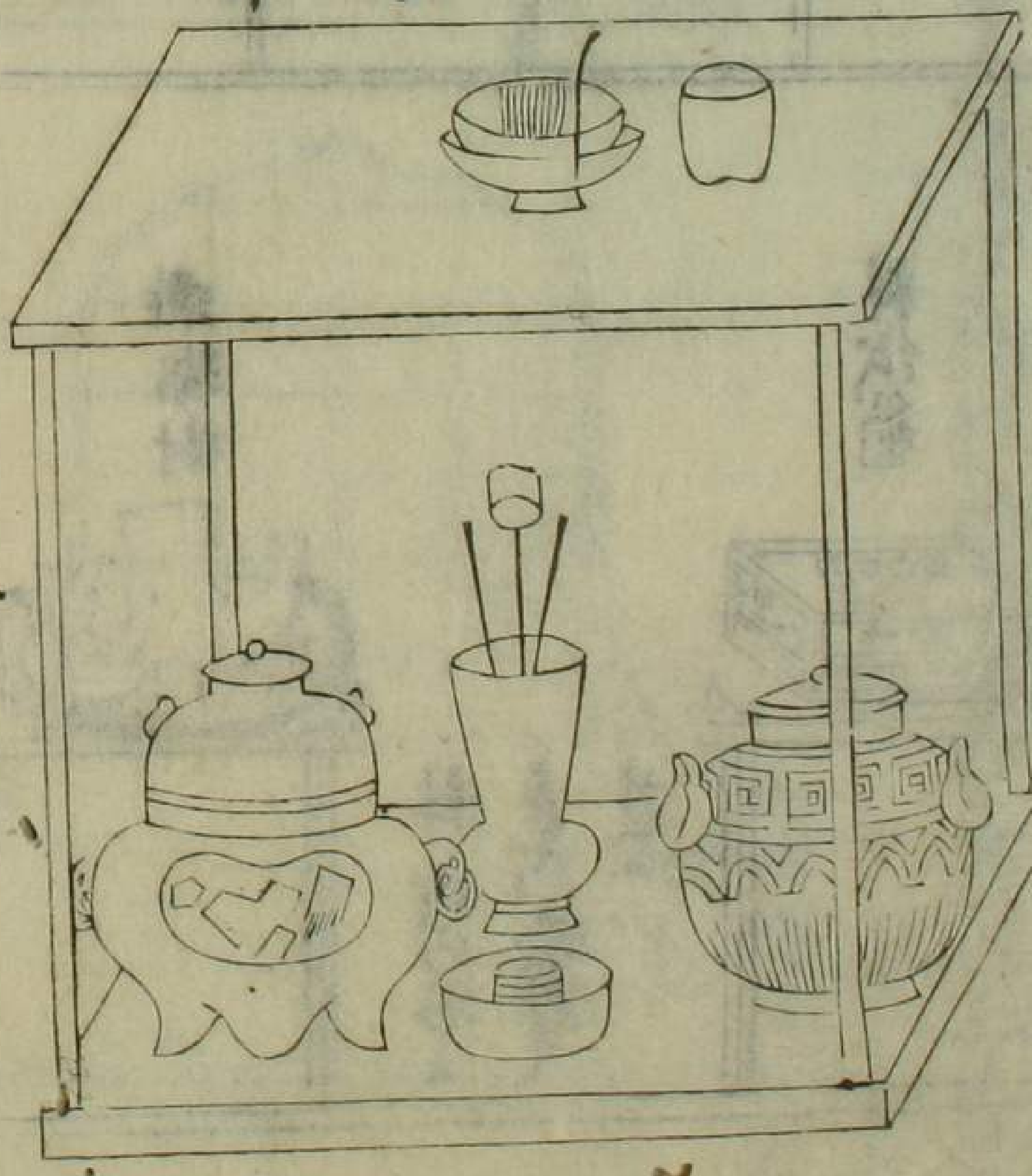
一荘りて掛物ハならぬあり板
おく時ハ上の方にかより
ん入あるべし

一よの板の内荘りんとつ
らべし前ふ香炉かざ
らぬ時ハ香合よ香炉香箸香匙ち香合のお小仏雑紙香合
るべしるる手掛もてるる地掛物も條掛物下てるよるべし

臺子荘り之事

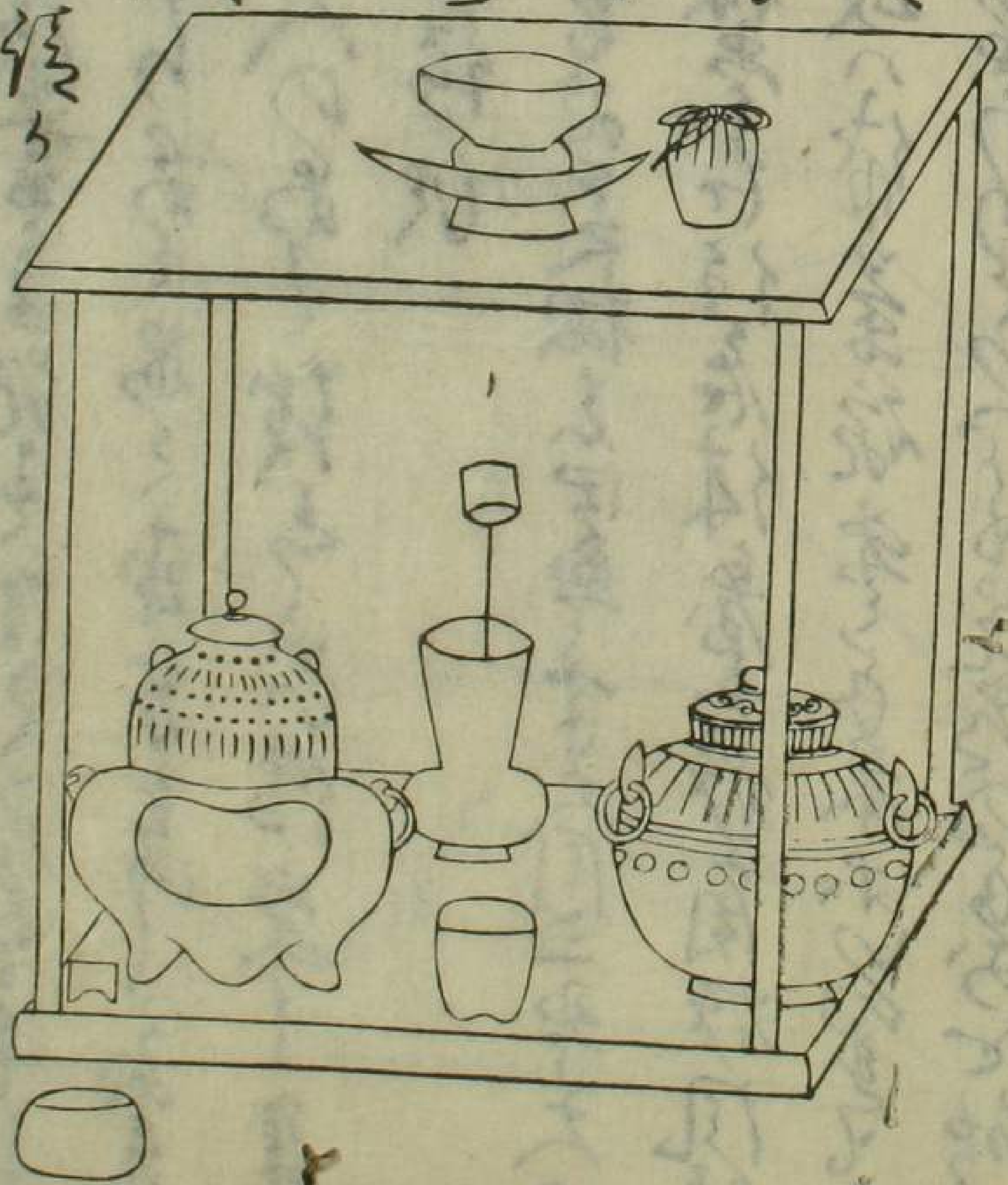
一書院の間にハかならず臺子を一かざり置合るゝを附臺
子せんの居風炉は必らず荘る事なり濃茶を點る
茶とをせんハ薄茶をさる
つる事ゆへ茶碗ハ
臺子の茶碗に荘り置
なり臺を置合るもの也
柄杓ニ火箸を一せんにたて
やかんよりも一也置合にて
其の臺子のかざりたるハ
委細にしるす

右臺子真の荘なり



臺子臺天目の事

一此臺子なとさまの様なり
まさる事出来様にて
臺天目をおもハ大切に
茶入ハたゞ人臺子ニ
かざりはことにまんくの
名物の事也
一臺子して臺天目を貴人
ある位の人ゟ又ハ名僧智識か
御臺所中前の何ゟ又ハ親祖父親などよ茶すゝめ候へ
又おこしたまハせ候



一　主客御成仕附ハ殊外鹿大目也数寄屋囲ハ成かたく
すへて手段多くて云かへ難し

一　茶の湯一通りとハいへとも此書に記せしハ今ことふらら
侍居の庭にて専らなすところのものにあらす方々の家の年
來行れし宗匠名人の書を撰ひて今の傳授を集
く世の人の心のつきよき事を記す

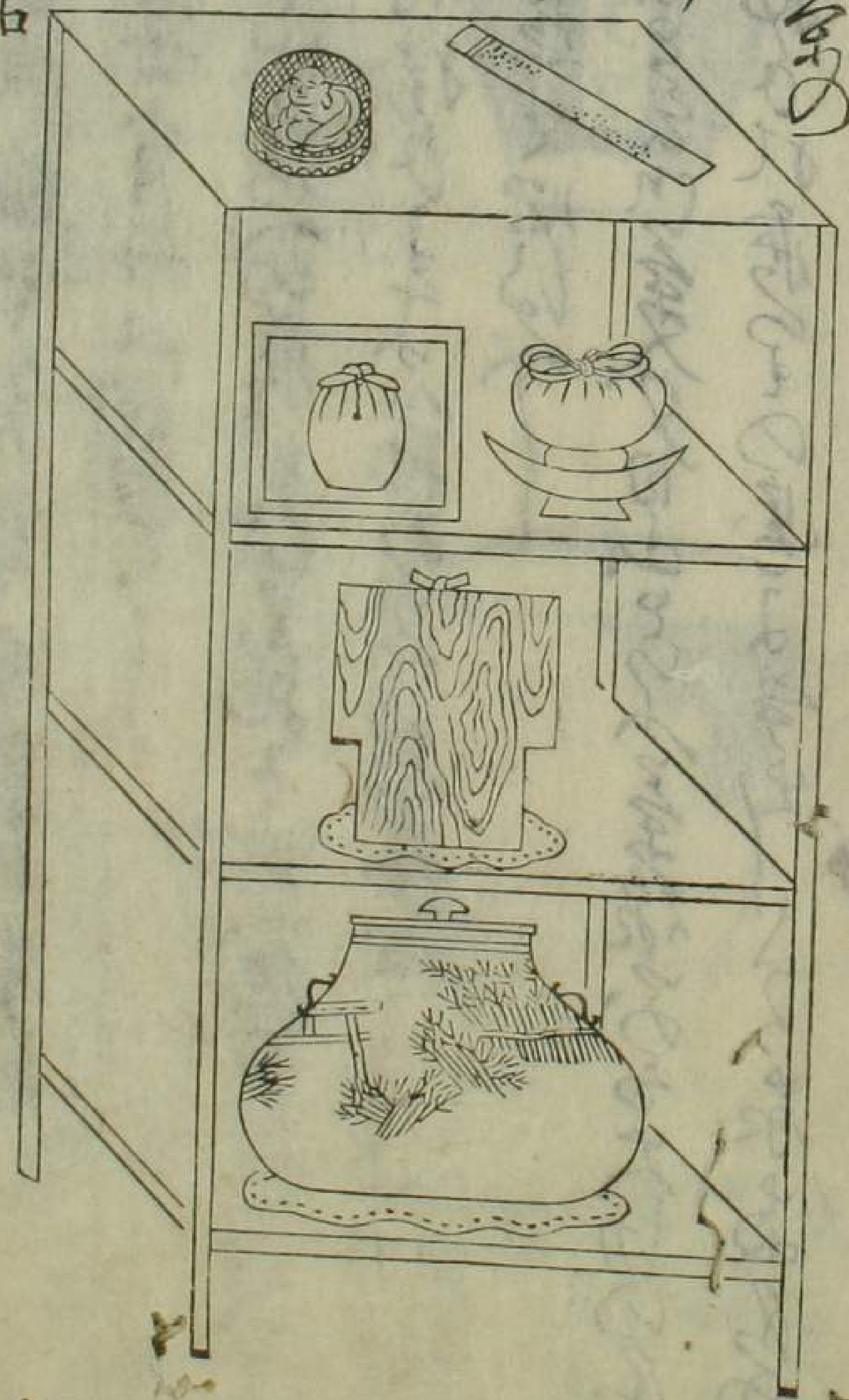
一　臺子ハ真の臺子ありて又ハ袋棚之板ハ真の臺と云大二
畳大一畳半大目又ハ長板の住居体屋炉角炉風炉
もちゐ置とも臺子或ハ備茶碗茶入茶杓茶器薬
合點も損もあらん皆先もありといへとも是先の事を能く
點せんとする人ハ所にて得と心へやすし

重棚名物勝手莊り

一　此名物ハいにしへの茶の湯ハ太閤之代にて作り
設所様聚楽第にてなる
ちよ茶湯の品茶揃へれ
茶もえて此中傳へる

一　釜ハ古芦屋名ハ挑文

一　花棚ハ唐金名ハ　佑



一　茶入ハ漢名ハ時服　昔壊さういと大霍小霍と申二つの名物有小霍と云し茶
入ハ中に牡丹花の彩よりて付ハ此字つきと云ほと傳ハれるを小堀
此茶入ハ肉由名残りて
名物のほ茶入とも御茶入てあらし　又唐に金妻中納言殿御手にありて

一茶碗ハ高麗大德寺後又紹鷗ニ有て掃部所持之名物ハ
夕日山といふ名物也

一釜ハ鹿抱ぐり角釜茶碗釜と同前也

一香箱ハ陽成 張成 堆朱ありにて布袋の香箱

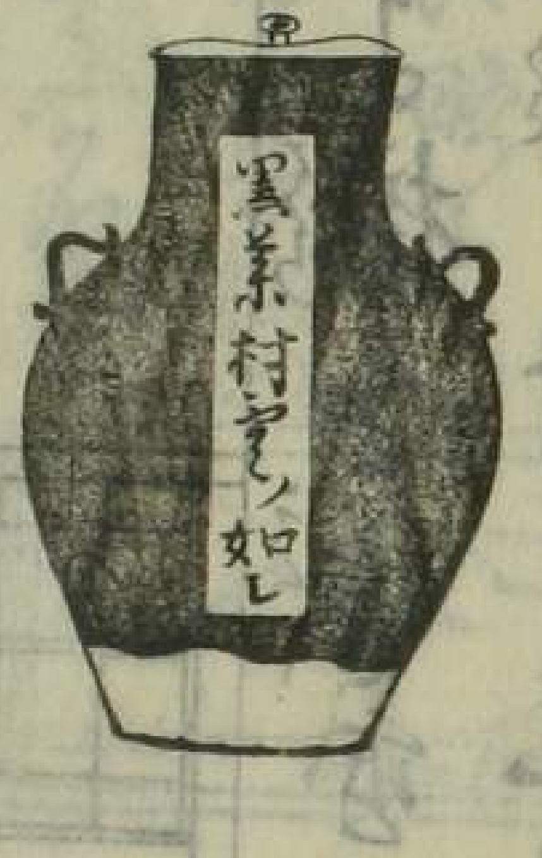
一茶杓ハ宗易居士小月作也筒在り

右之道具勝手ハ炉の後への勝手也此名物之内へ勝手にて八代目
相生て花入之所持候て名物ありて数寄屋にて八ッ掛け
の道具にて茶事にて心得べし

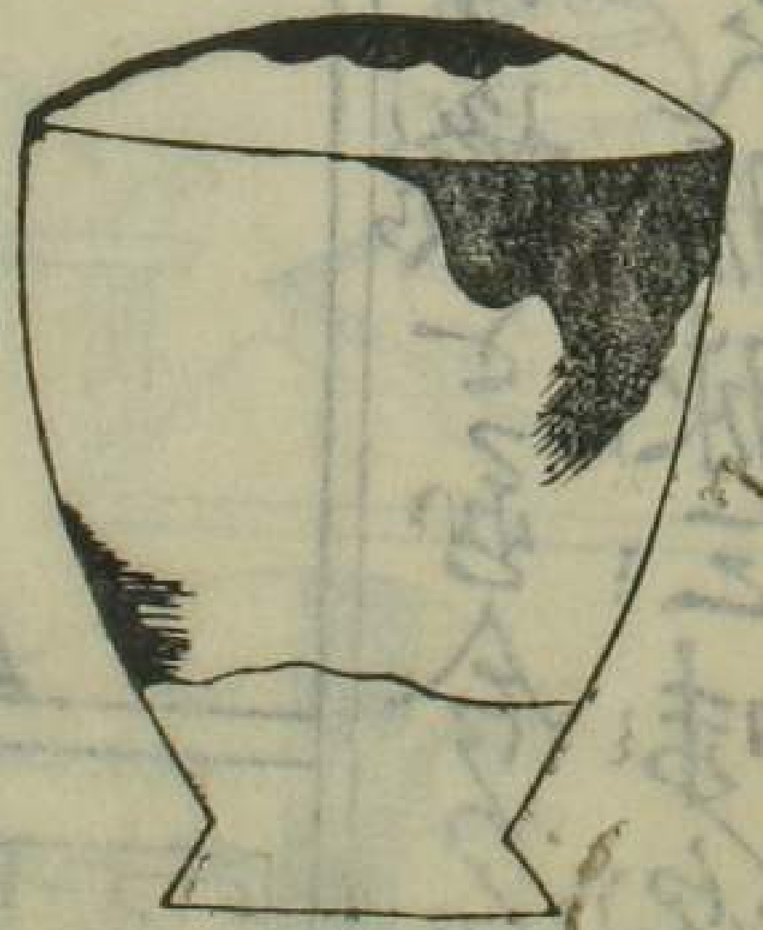
一右名物之内時雨と云ハ茶入夕日山といふ茶碗ハ当大切の名
物也別ニ名茶碗の秘ハ花入の名ハ手出し不入名物
のからくり茶の秘事なる器として寄具無し也

時雨といふ茶入のかつこう
黒薬耳付薬留め也

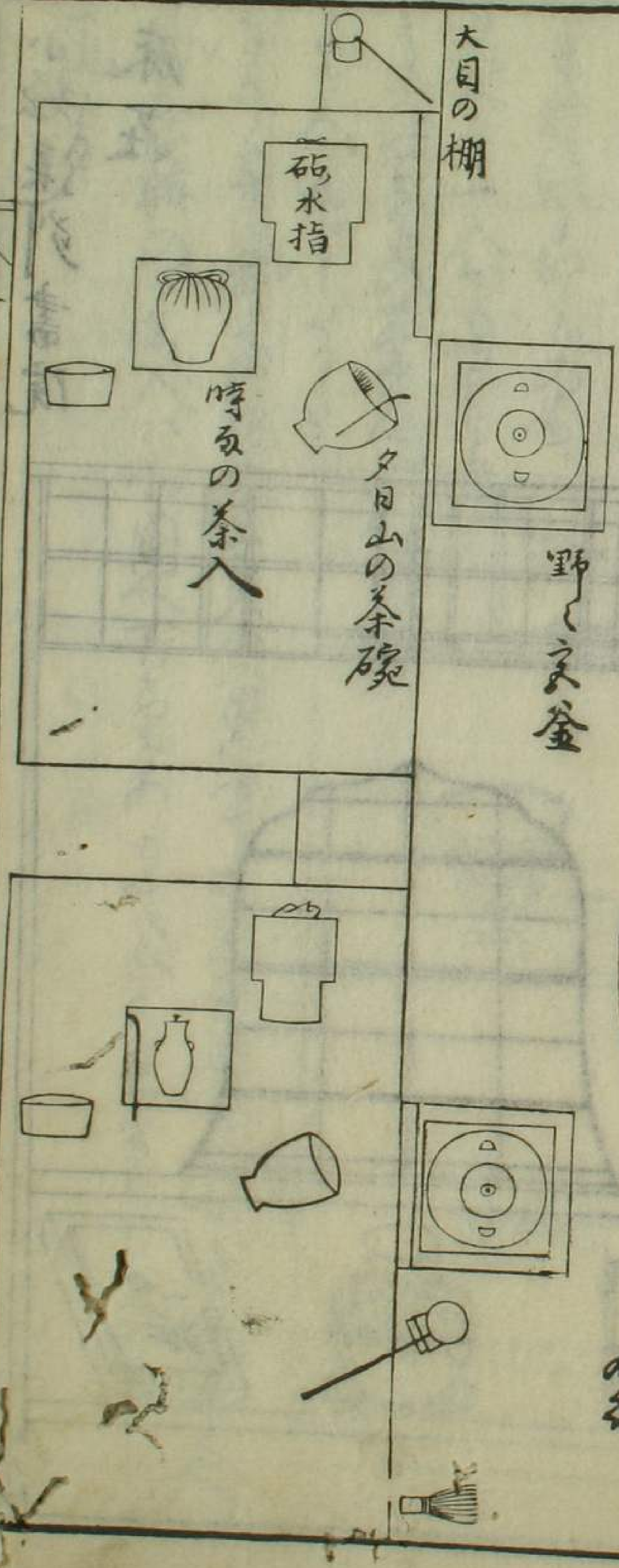
高サ弐寸八分
廻り弐寸弐分
重目 三拾三匁



夕日山の茶碗薬ぐあひかつこう
如此

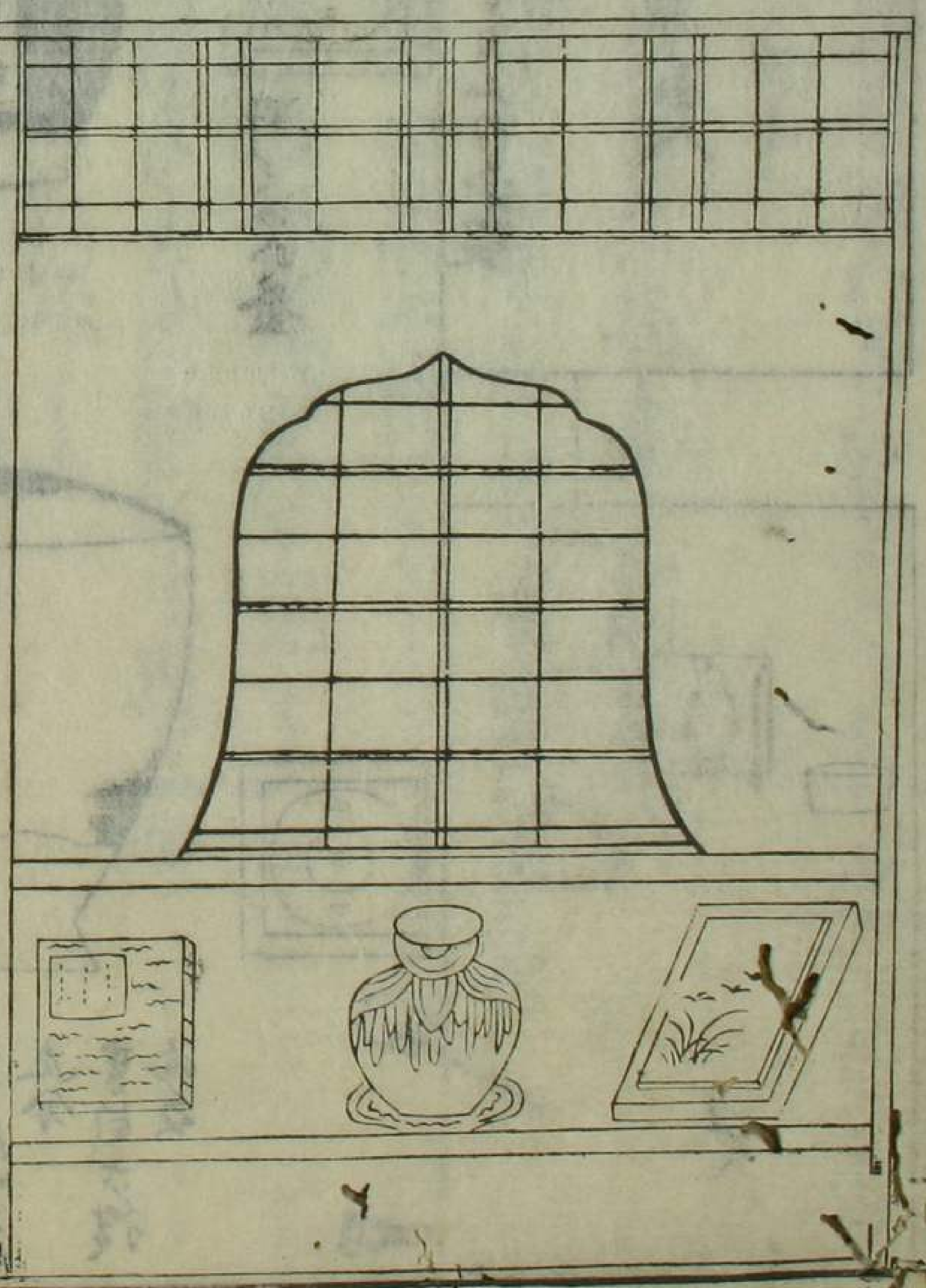


高サ三寸八分
口指渡し 三寸
弐分
こうだい 壱寸
五分
重目六拾
九匁



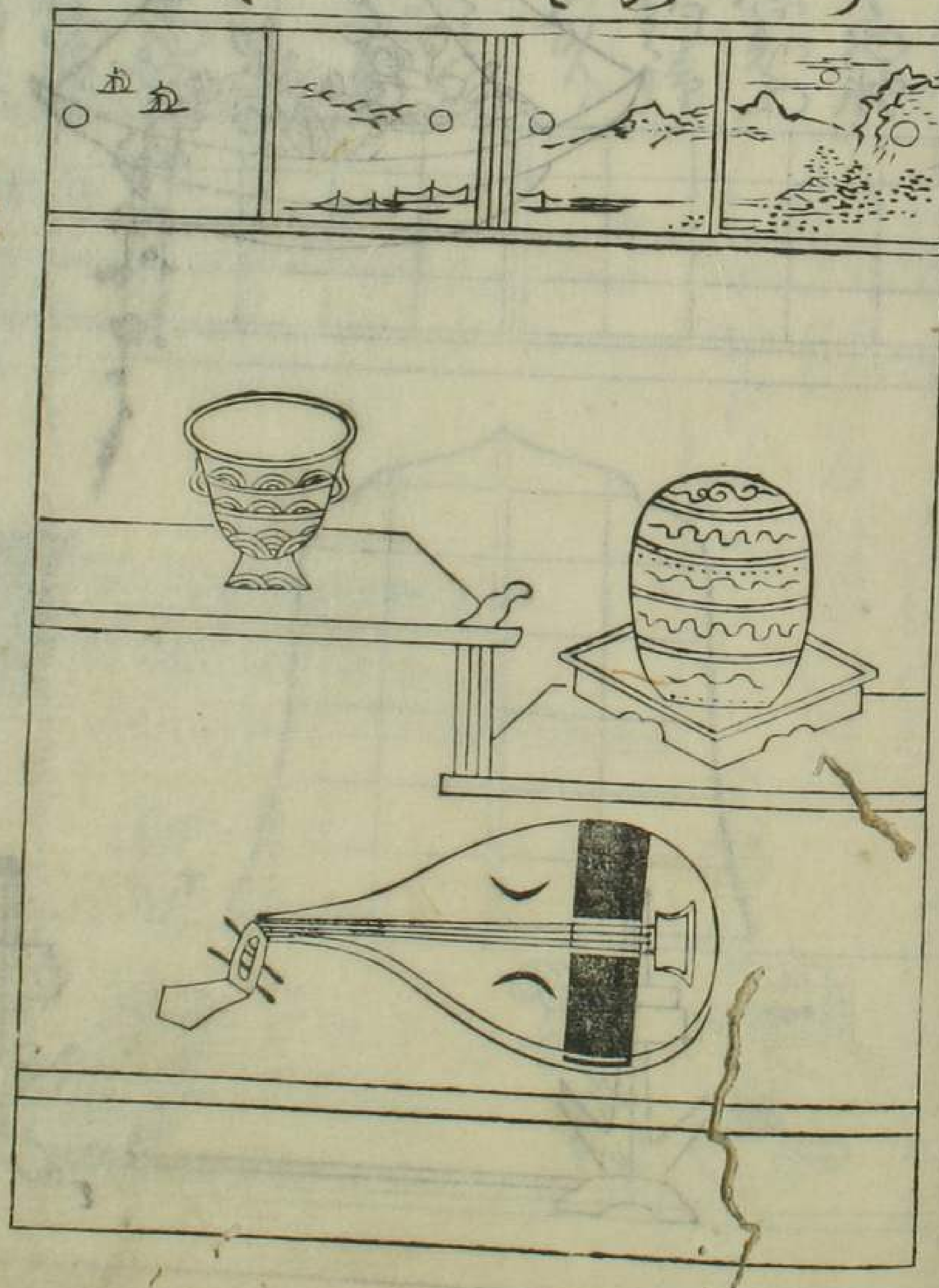
小堀遠州書院

床荘



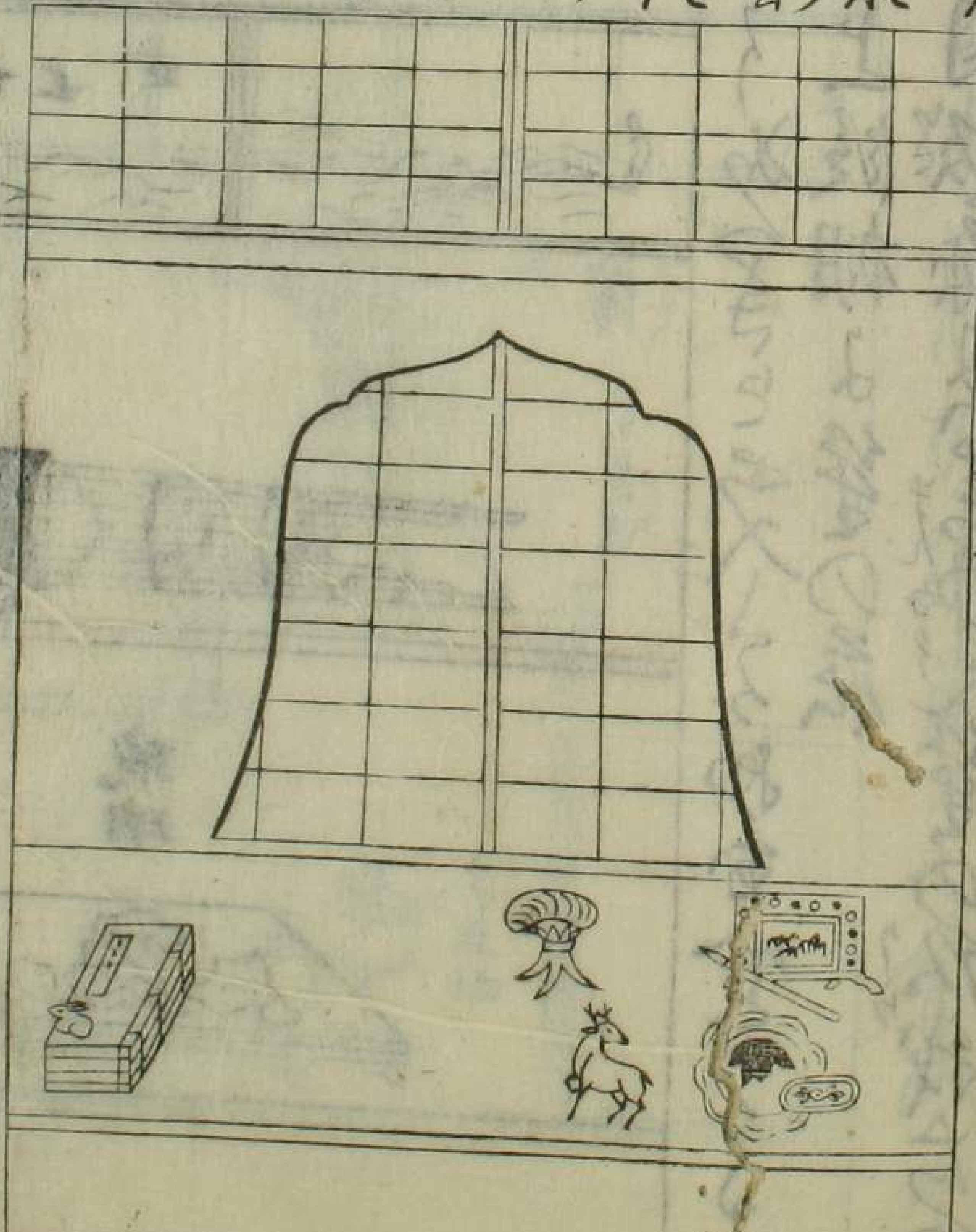
一琵琶に撥を添ゑ向もに撥を添ゑ今これハ絲纏に又琴荘る時よ爪ハ不添琉球三味線も荘るときあり撥ハ不荘

違棚　遠州棚荘り



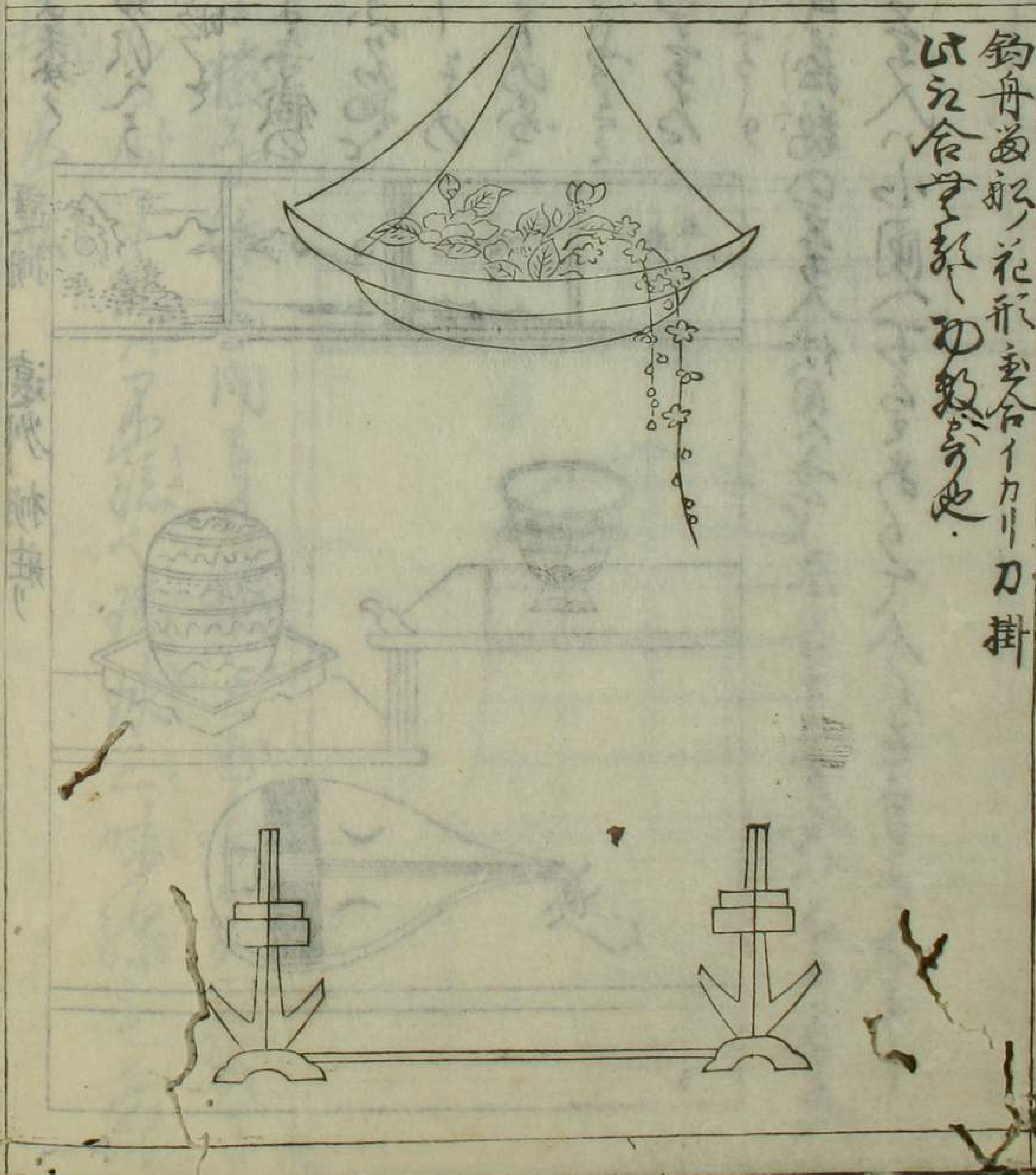
一荘りの事よ委く本法をあらはせへうれ此へちに略を一遠州伏見ニ守護の時翁ハ書院ニ花をりかざらまし其の書院絵よかざりの事ニたへど一入面白きその此天下の茶人もとへんじたるかり茶ニ武蔵鐙の茶入伏見ニて京堺を数寄及ぶる事也武蔵鐙の茶入ハ小関人不遠ありて今ハ在方ニ然とおなや風雅

一 右向ハ左の方に見床硯墨ハ筆架左の方に墨池絵ハ床の当所にて探幽か筆下ハ見床に置不釣鐘窓の縁と角との間あり又ハ窓のふちの中に入れとりても同じ事すき所のごとく又向の角へよせても置く文鎮ハ書物の上に置又左に紙硯箱左に硯屏を床に書物二冊にてよし又口掩の臺を飾るもあり手附ハ釣鐘窓の中に墨の臺と置件の如く飾に又料紙箱内り硯箱入置左に立手拭或ハ底なき帙入花らべし



古田氏ノ書院床之飾リ

同床



釣舟葛鉢ノ花形香合イカリ刀掛
此ニ合せ様ハ如数多也

一右の棚ハ上段なとは

荘りハ一様に不拘候て

取く方〻により又ハ

荘りやう沢山あり

一此棚よハ銭のきれしよ

あしさハ備入まて

よくざう

一上棚戸の内よ伽羅（きやら）

并料紙（まうし）棚ハ不及すら

軸（ぢく）の拍子盤（かた）其外かんし

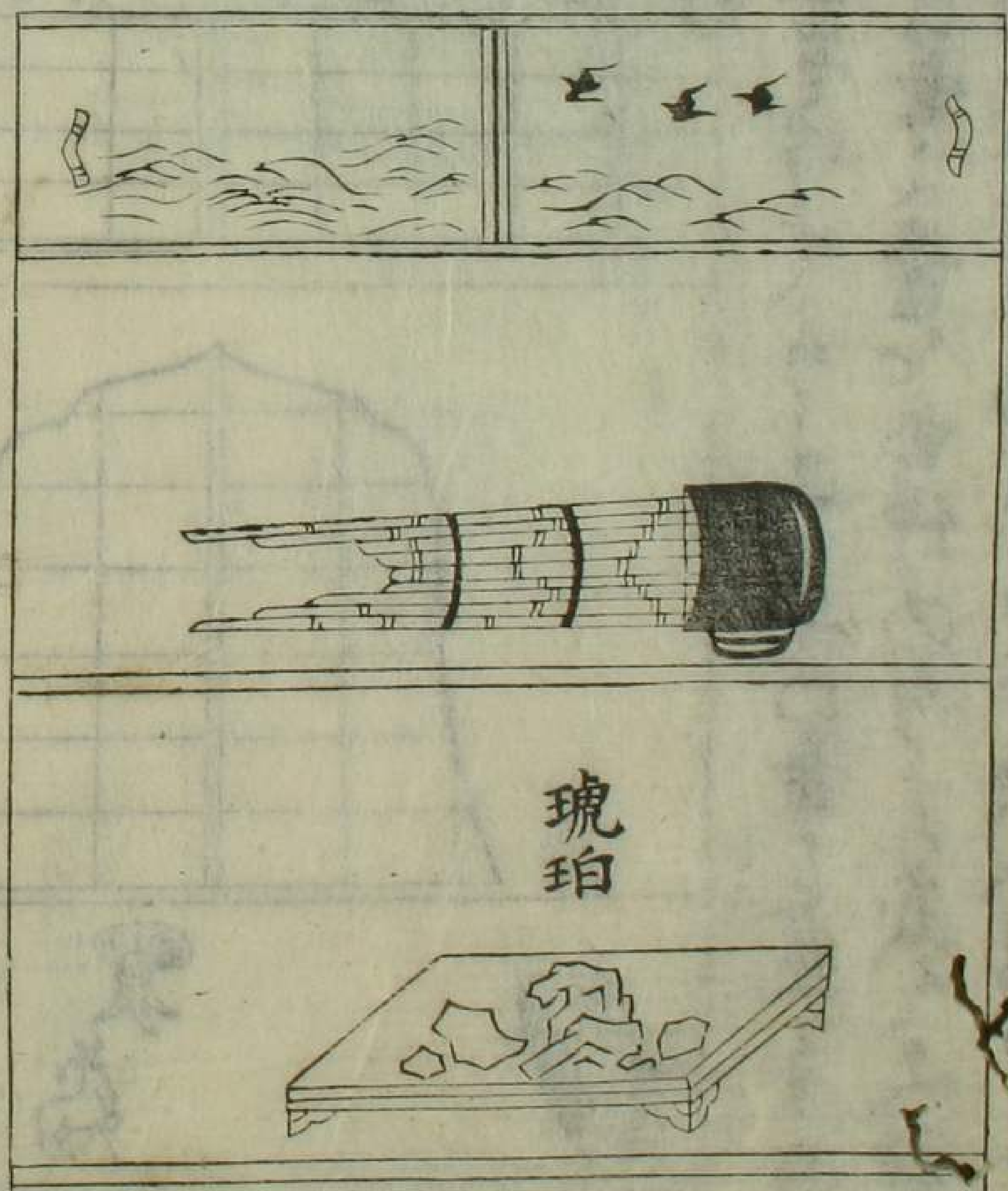
と付よかく宮の飾（かざり）めつきともえころ御座候すへ

行器なり　上段棚よ壁の荘

一違（ちがひ）床（とこ）まて六尺一間板（いた）床よハ真中（まんちう）く壁の次我（から）左へ

通棚

古田氏棚荘り

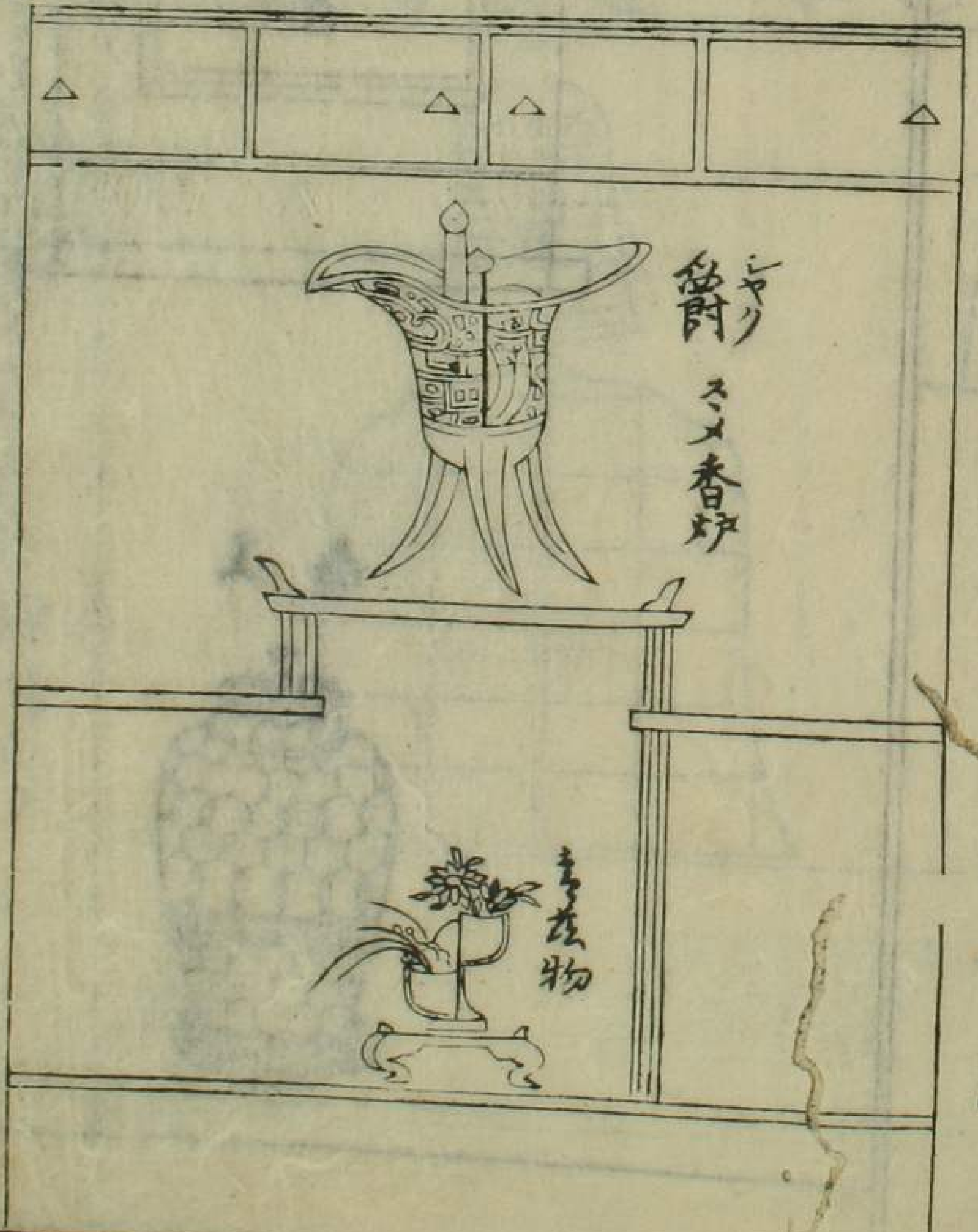


すりと覚（おぼえ）何方にても心懸して荘るへく備（そなへ）へりて

も不苦（くるしからず）

利休棚荘

千鳥棚


爵（しやく）
スヽメ香炉
立花物

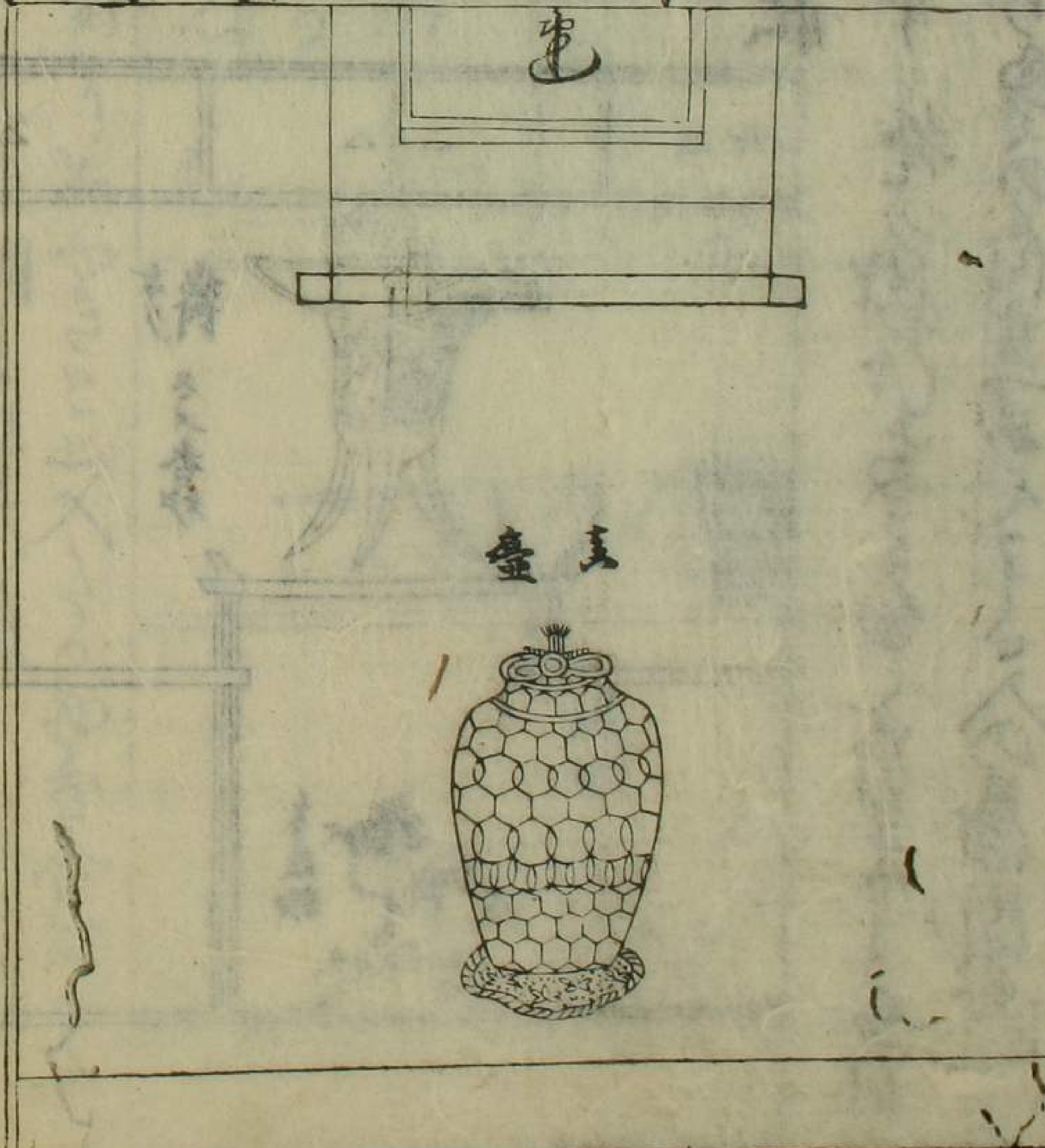
床棚口掩（おほい）壺（つぼ）荘

一壺の京おなし掩の結（むすび）あけるなと荘よまに

なり床ふちらち畳の目（め）六一めん入の蒲団敷（しき）て

網絎壺荘

一網ハ紅か紫よし荘ふおとし同しふしん数寄家に同し網口結びよ事七夕あり又端縫桔梗とんなう上端かこさゝ對付是桶乃緩ハ解さゝまくりて結と結とぬつわる也



一料紙箱の上其くの紙二枚あるハ三枚摩折めて置其上ハ硯箱かく置なり

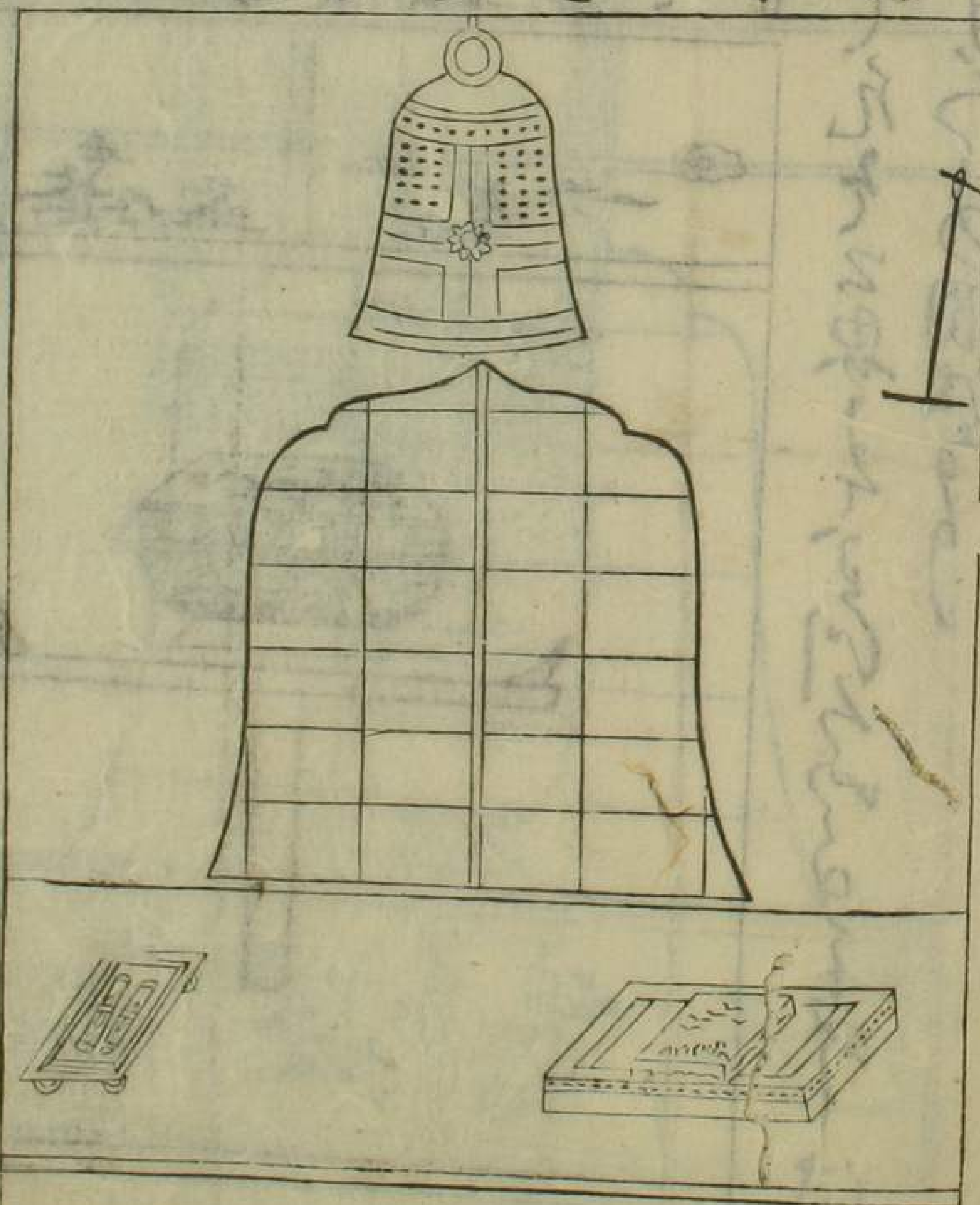
一地の物句端合よせて二冊地或ハ物ふらり

一冊よても三冊ほてもて置ともよいハ善意にも

一ま軸ハ此鶴結寝意の中尾形本掛の行方

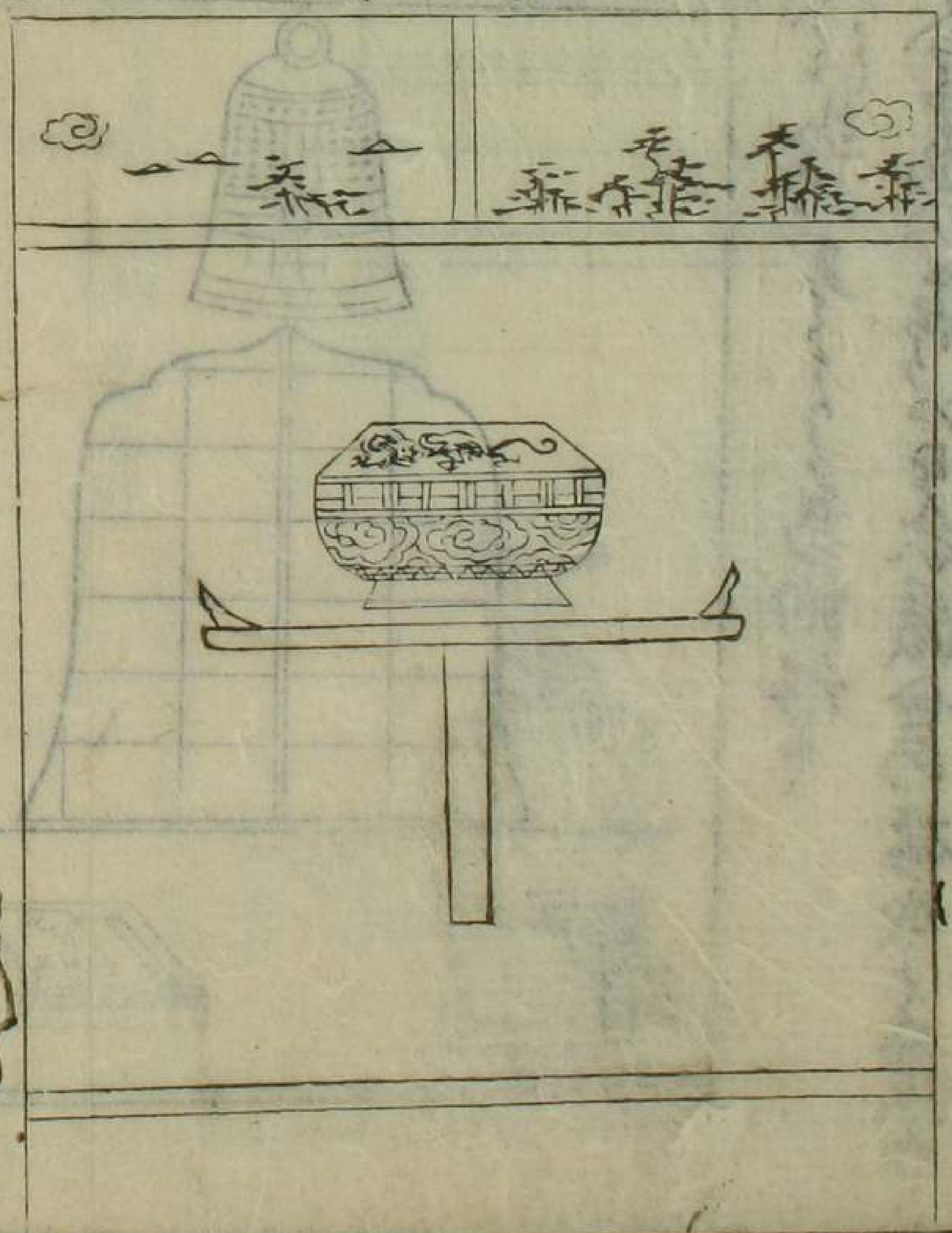
執らその寸法ハすべて法式の事なり義網結を

一此式物系軍知猪文字通の荘りハ此ん為後世の格式とするか此へ行し置也


喚鐘　利休書院床荘り

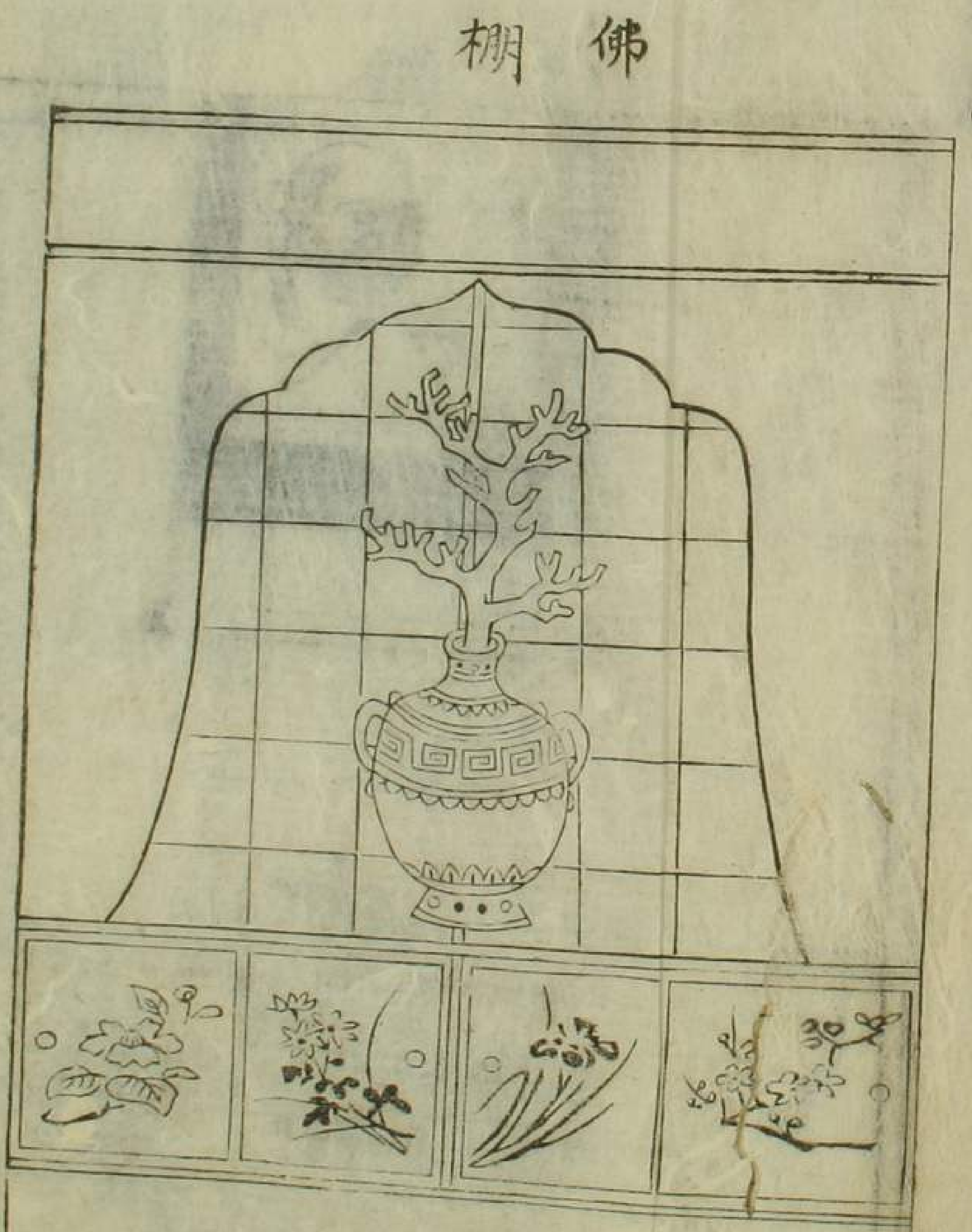
右書院床釣棚窓の
かざり床の荘り并板
飾り何も式法之通也
床の座敷の書院ハ
珍物也又珍器茶荘形
と見計ハ前ニ抛数寄
人有床の切かけのを
盛飾も此荘りに相法
学ぶ族のため用る茶の
さりふ案内なる事ぞ
あのうち名有りとも
とり用ぶに不知して凡そ以来まで有り気の毒なり けり其外ハ
茶の計にもわからず人々の調法なり

中棚ハ随庵板荘り

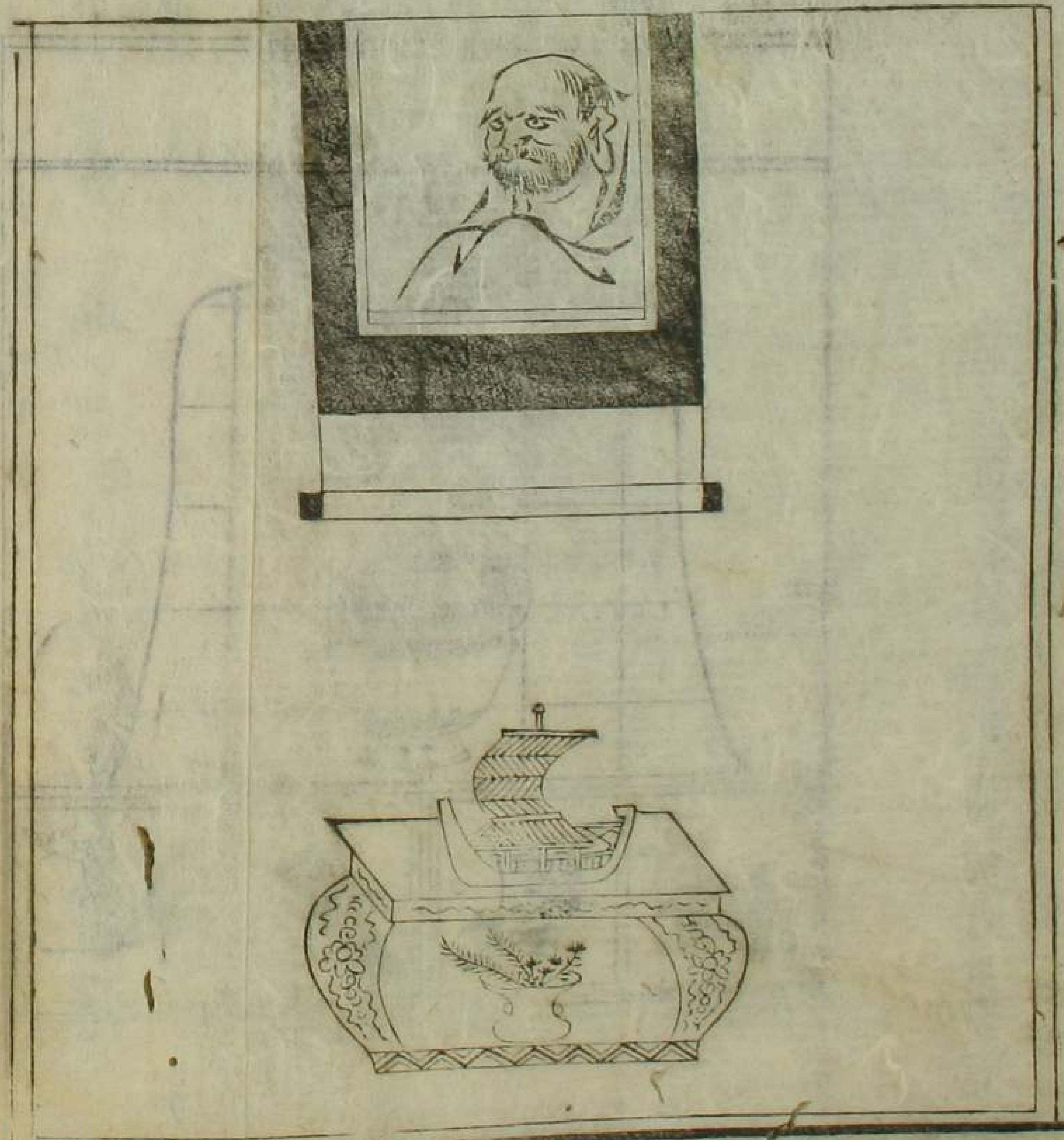


随庵床之荘

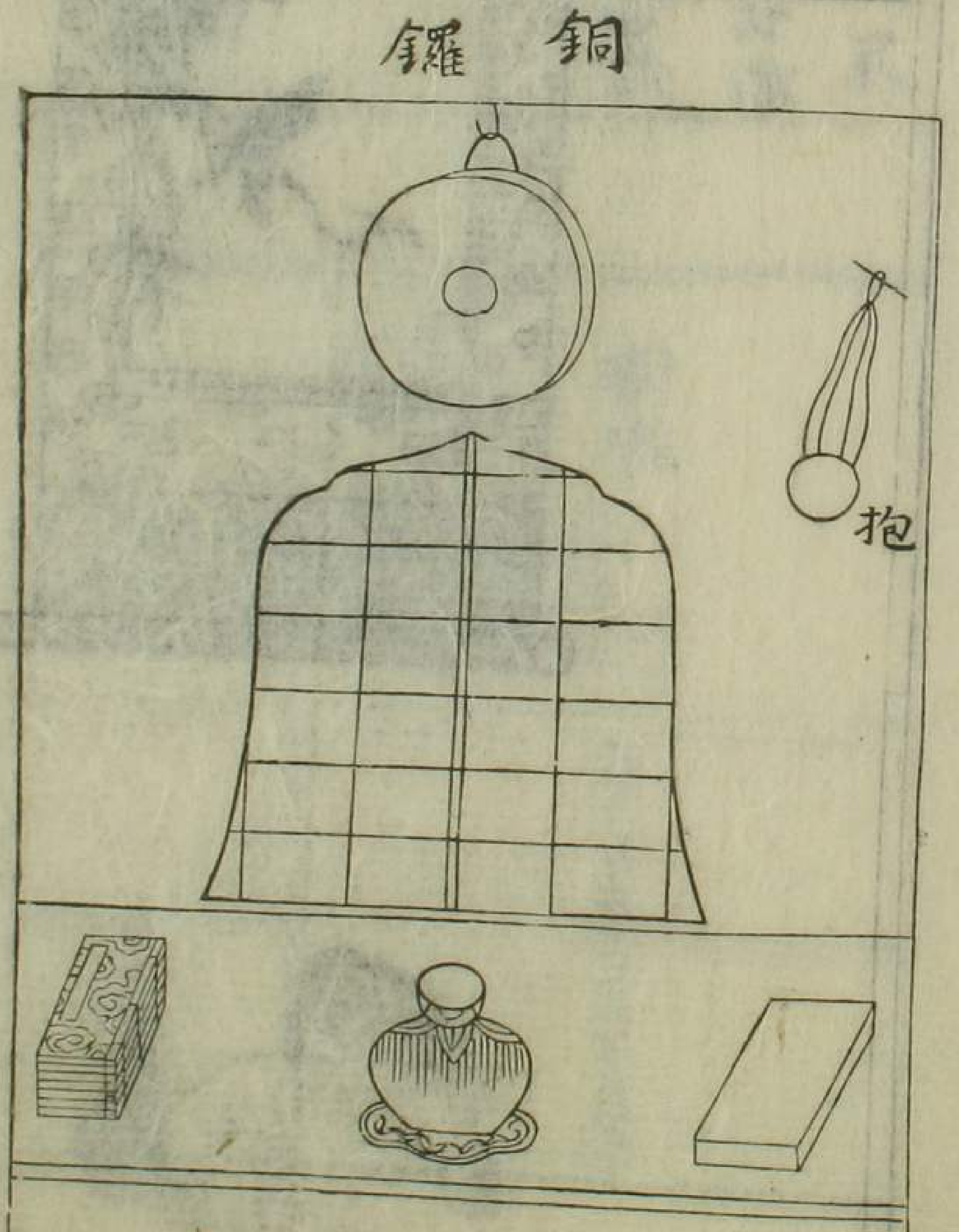
枝珊瑚樹之荘
或達磨置合



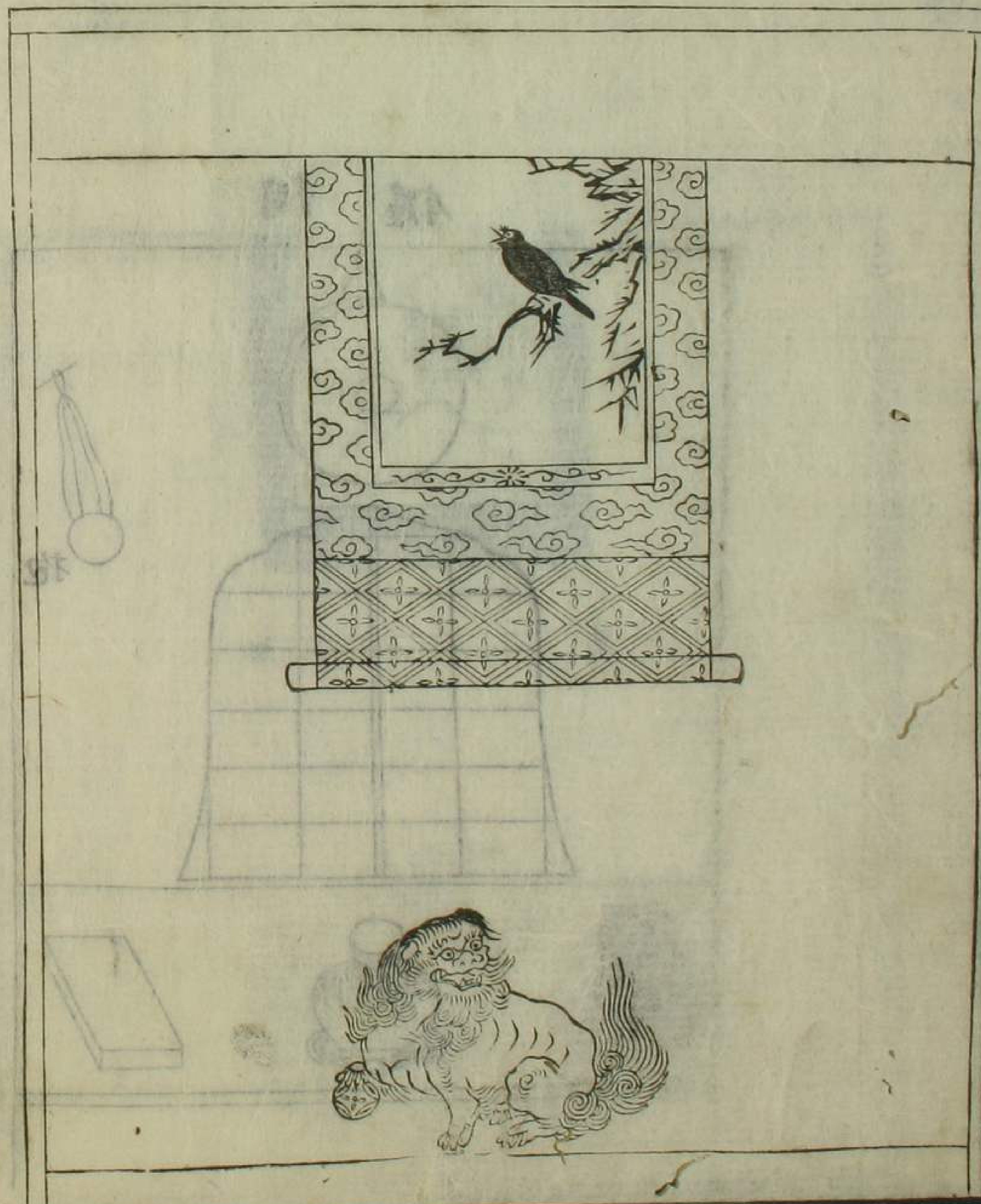
同荘



越前太守之荘



同荘



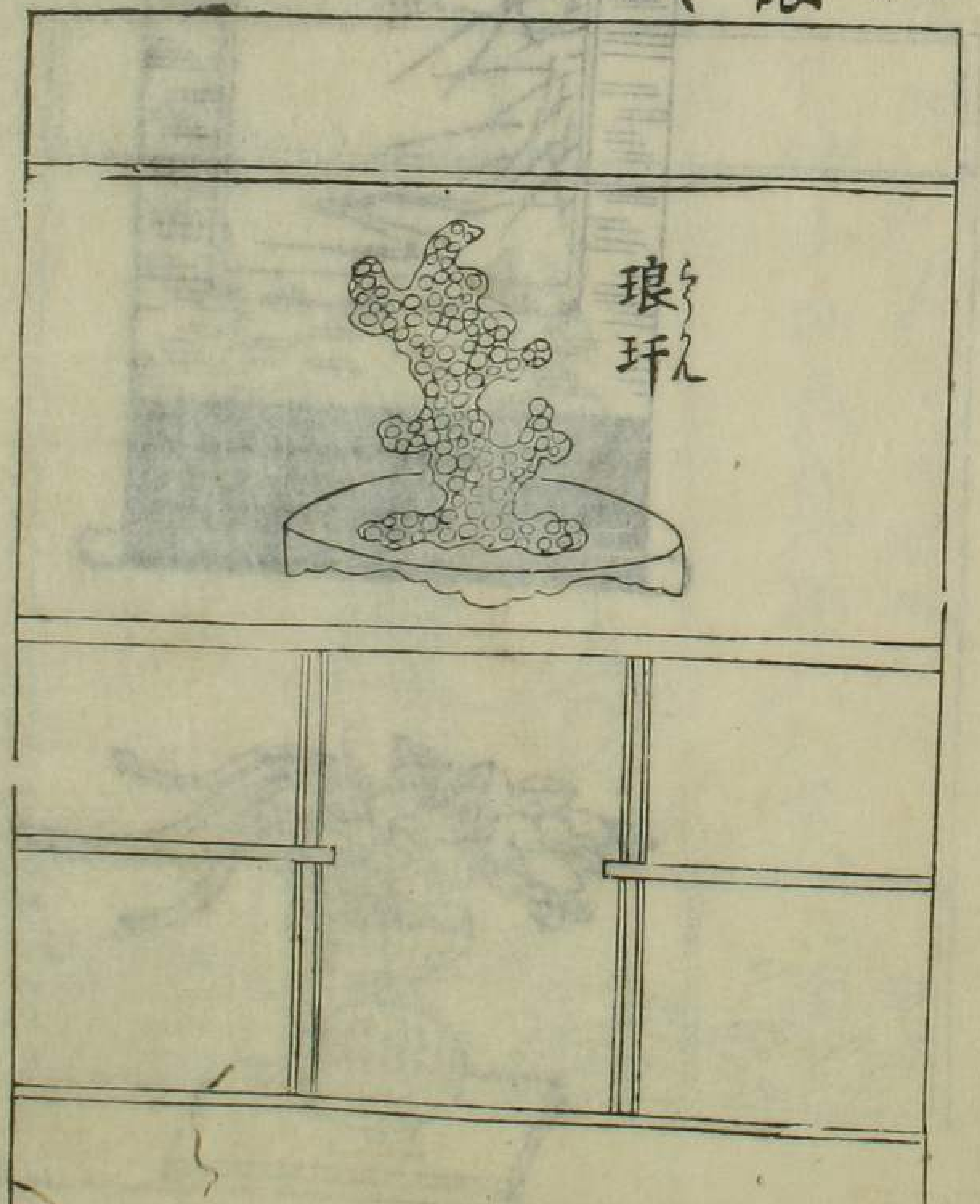
一番目御一門出振　具足棚

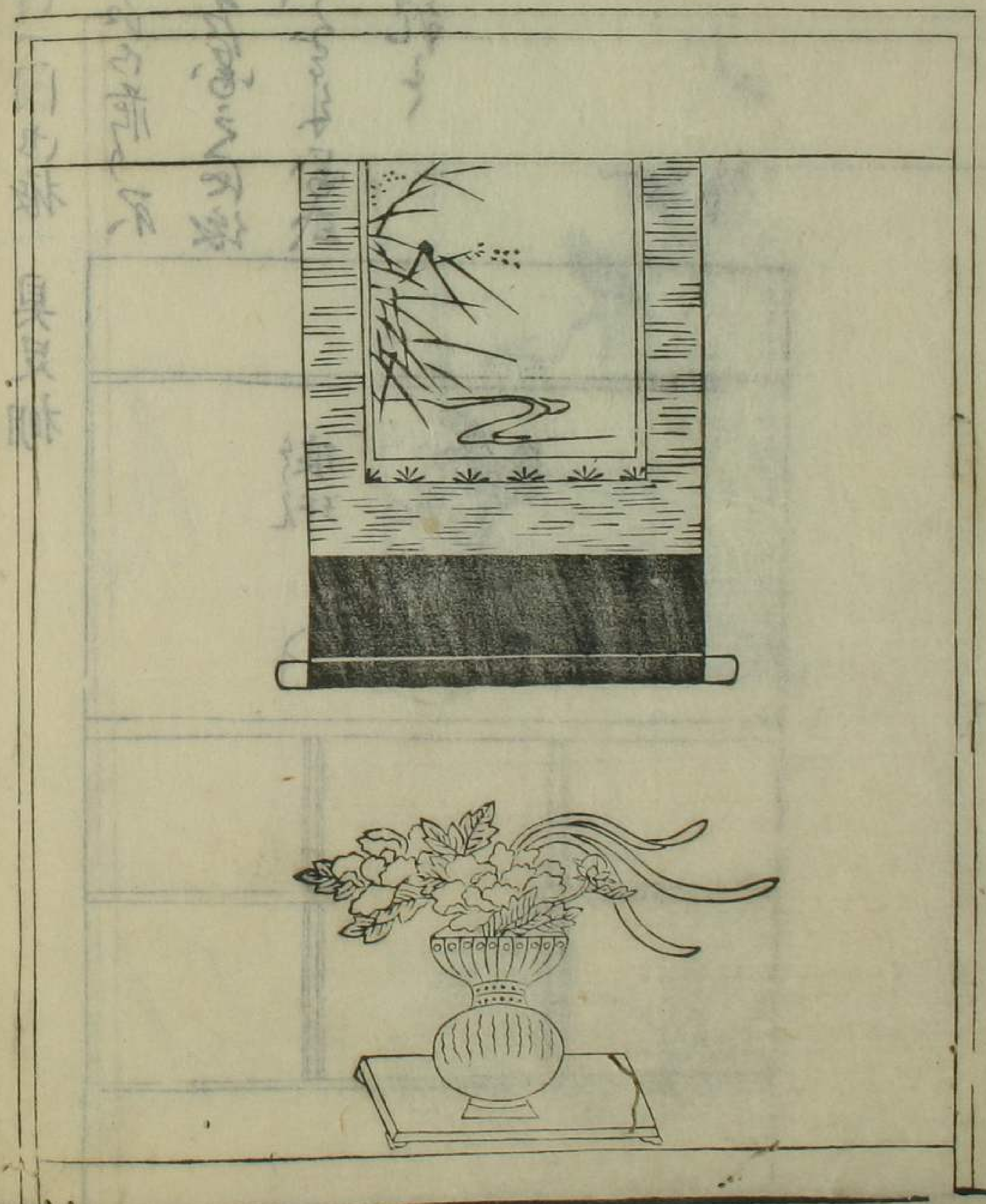
飾之時台子に飾り不

殊宗匠迄当家之旧縁

且写伝人ゟ手当式

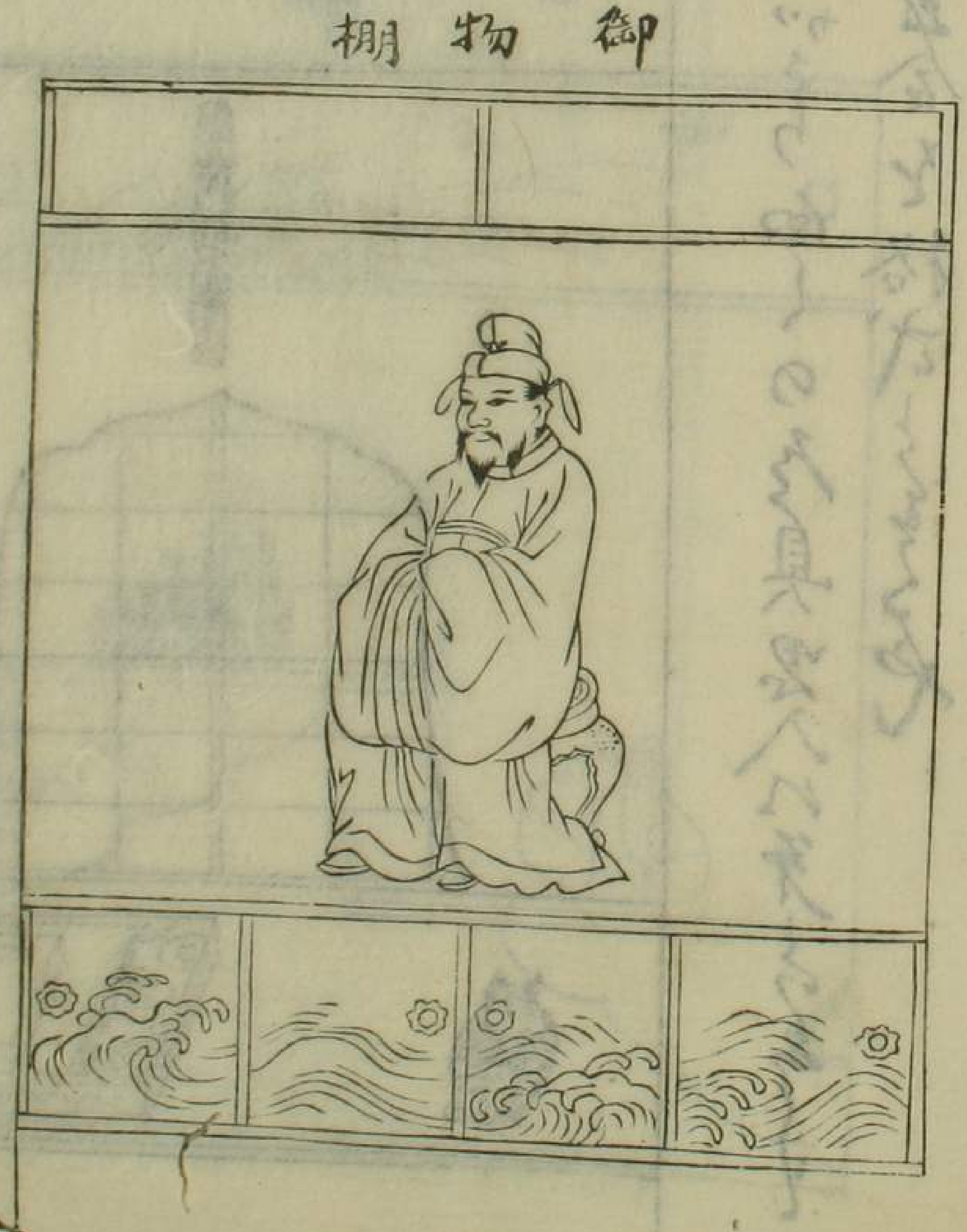
之也ケ記之



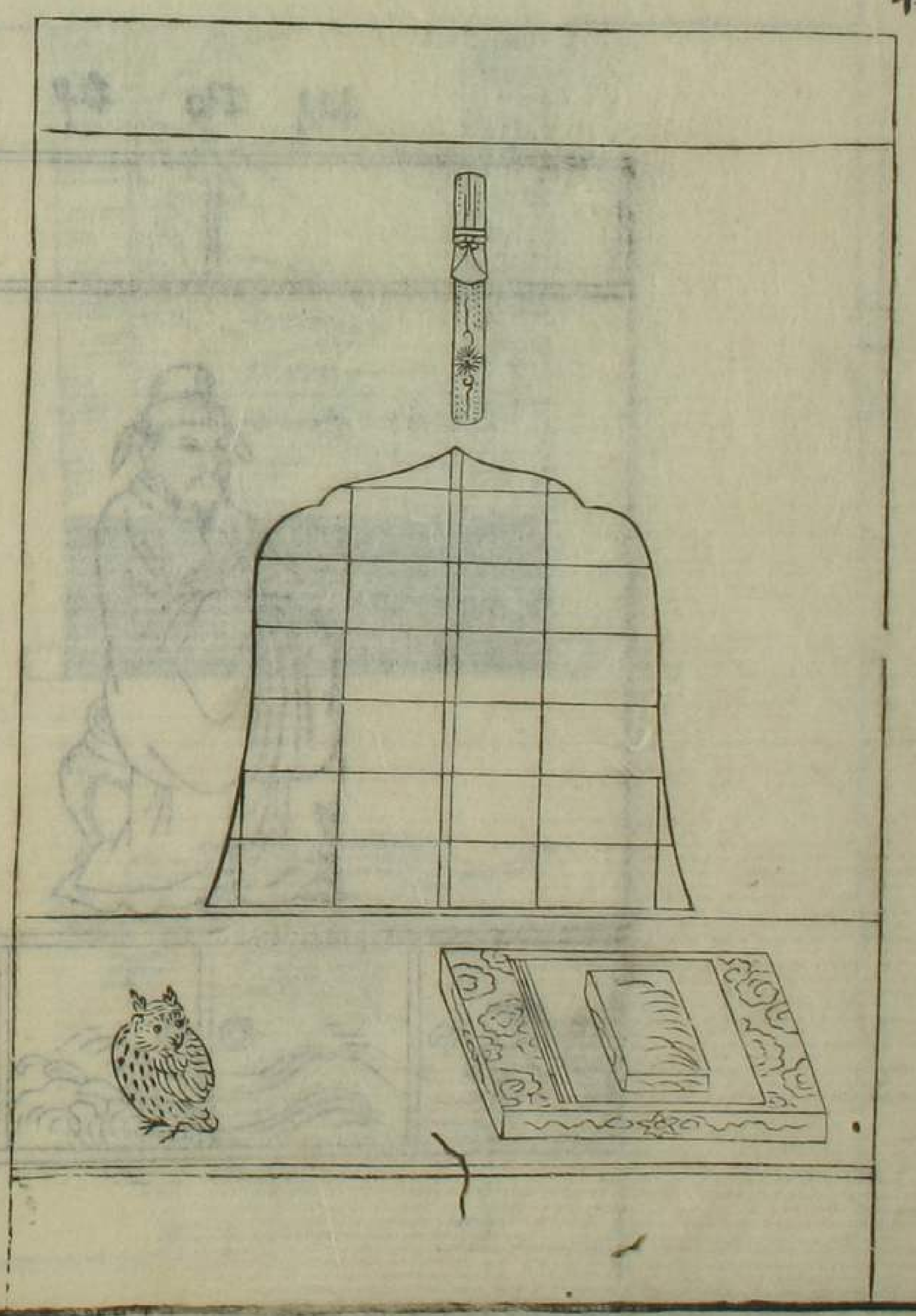


一柳氏荘

唐物阿蘭陀物人形



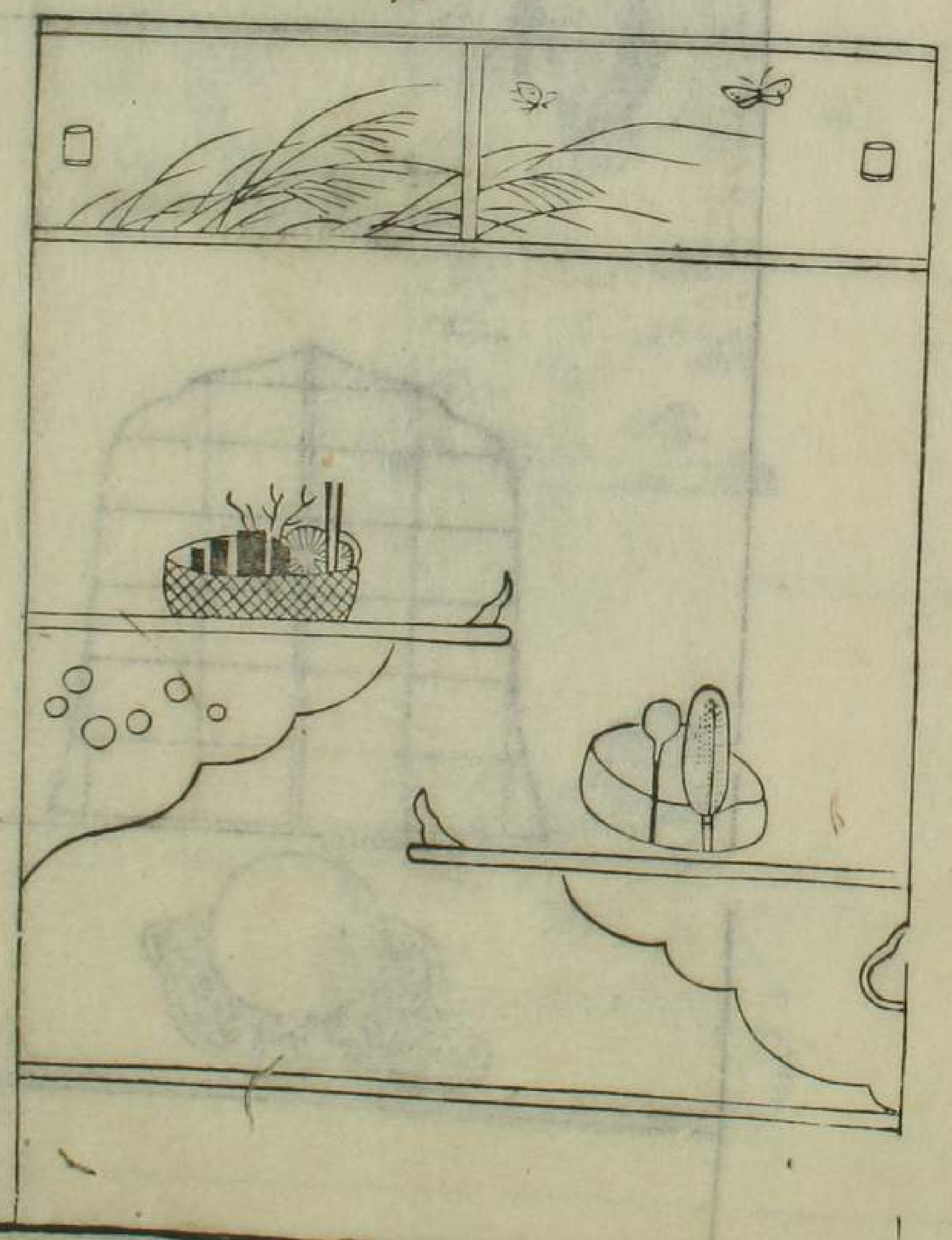
同書院床荘



一書院棚ともはかさり品〻の道具思入に第一とすへし
其外宗匠の取合を格式とする也

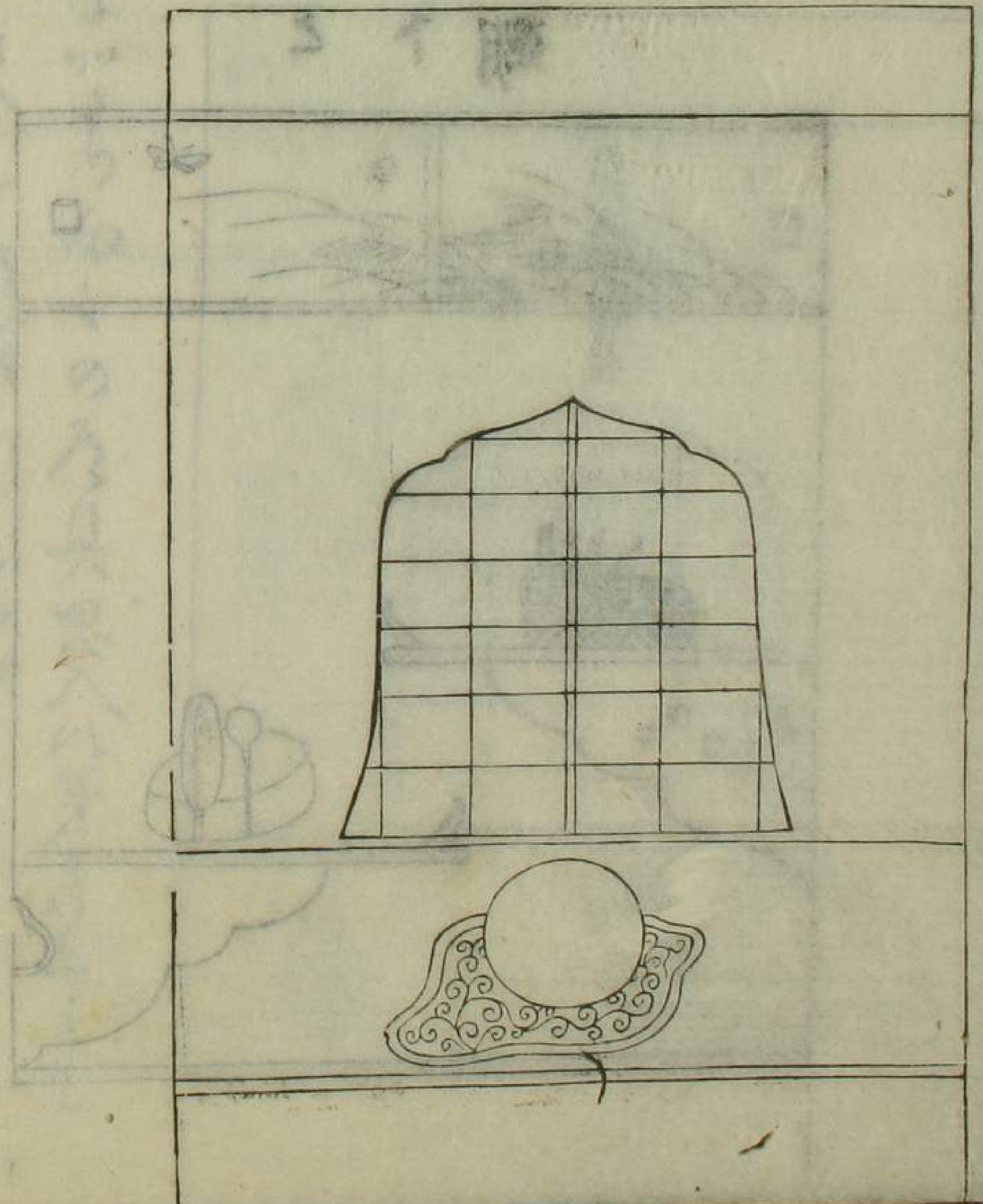
北同氏棚荘

上下棚

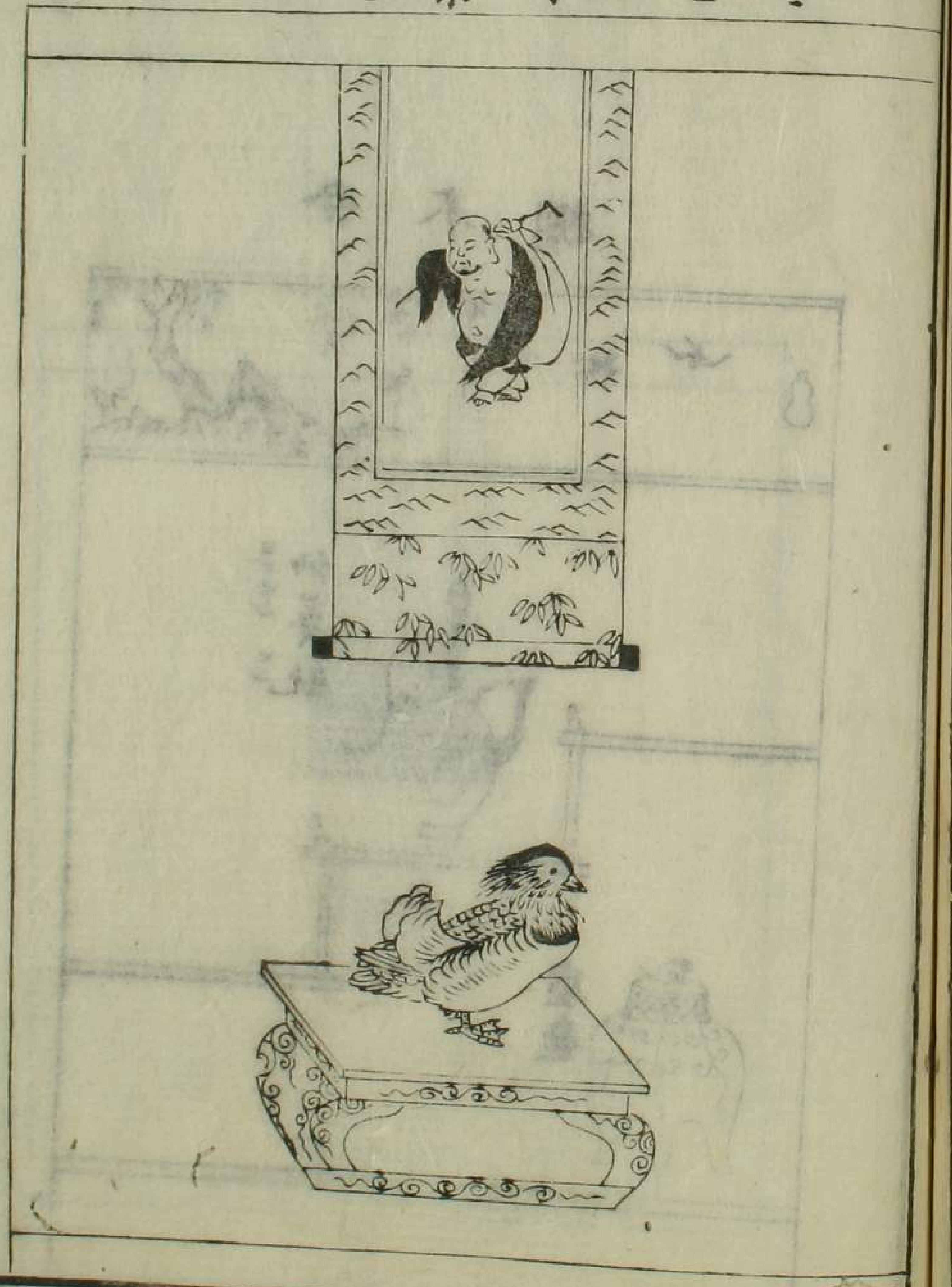


同書院床之荘

水精の荘

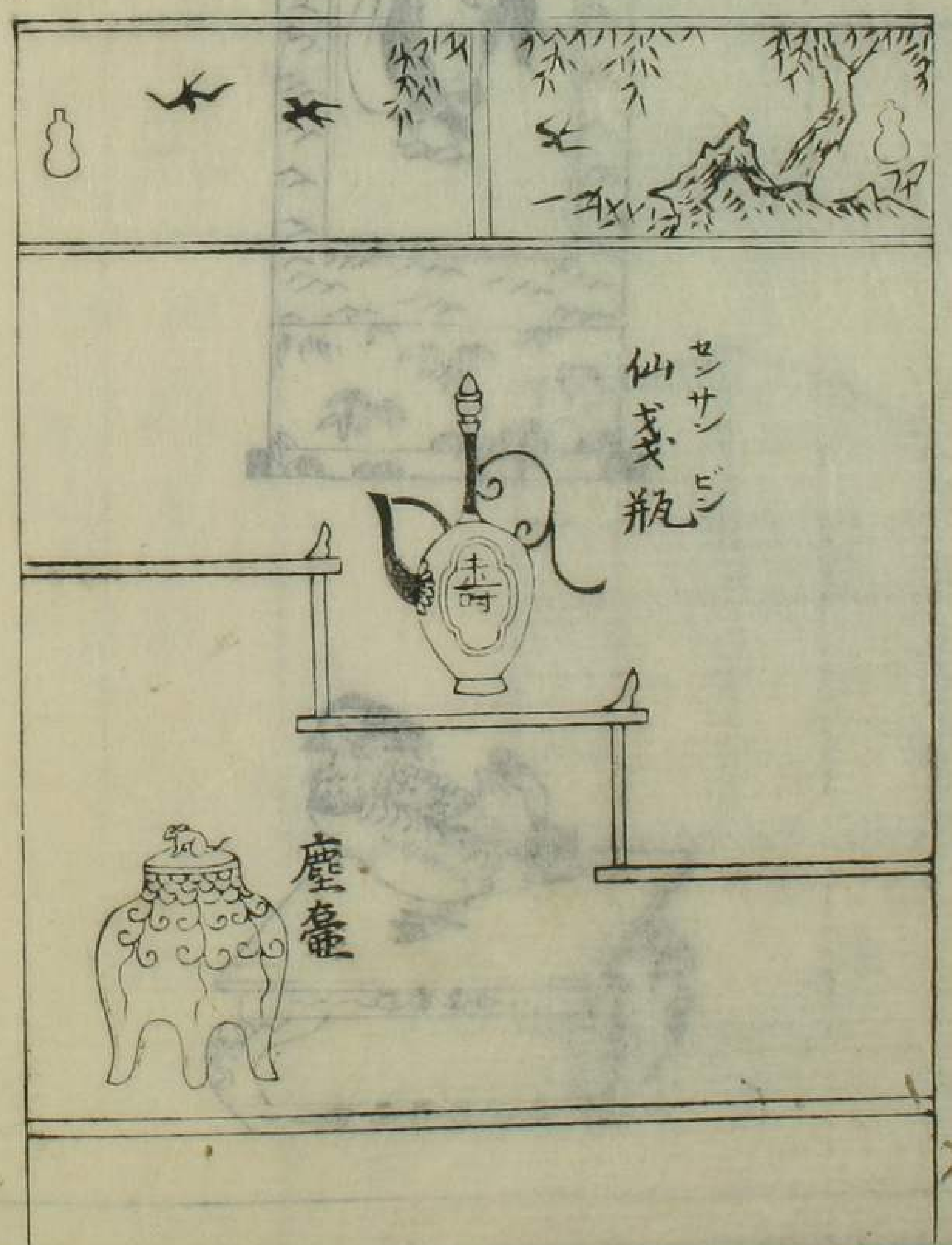


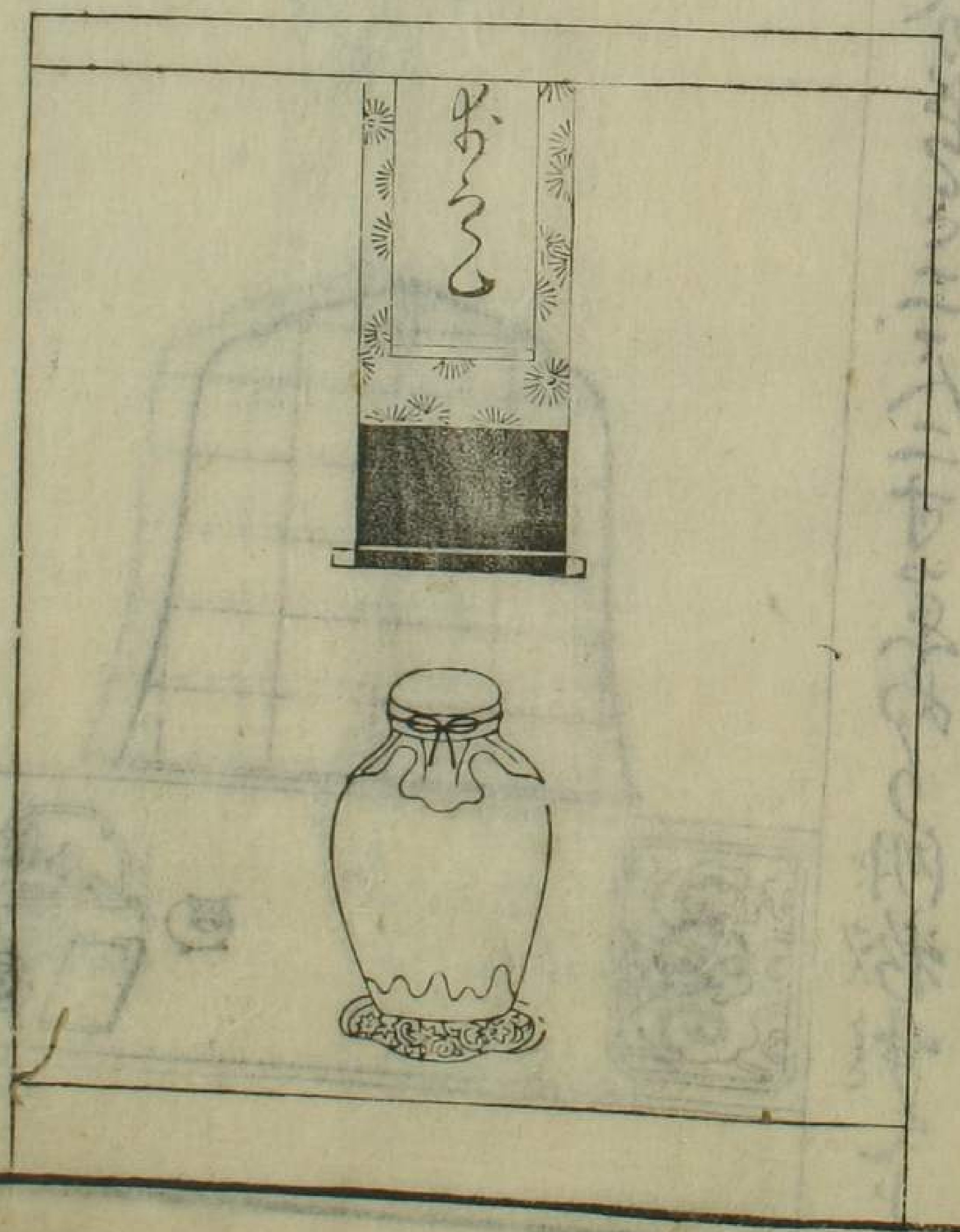
右之通荘ニ
珍る事なし
名玄代棚の
荘路及格式
あり利休宗
匠の玉合也



行和石見守殿棚荘り

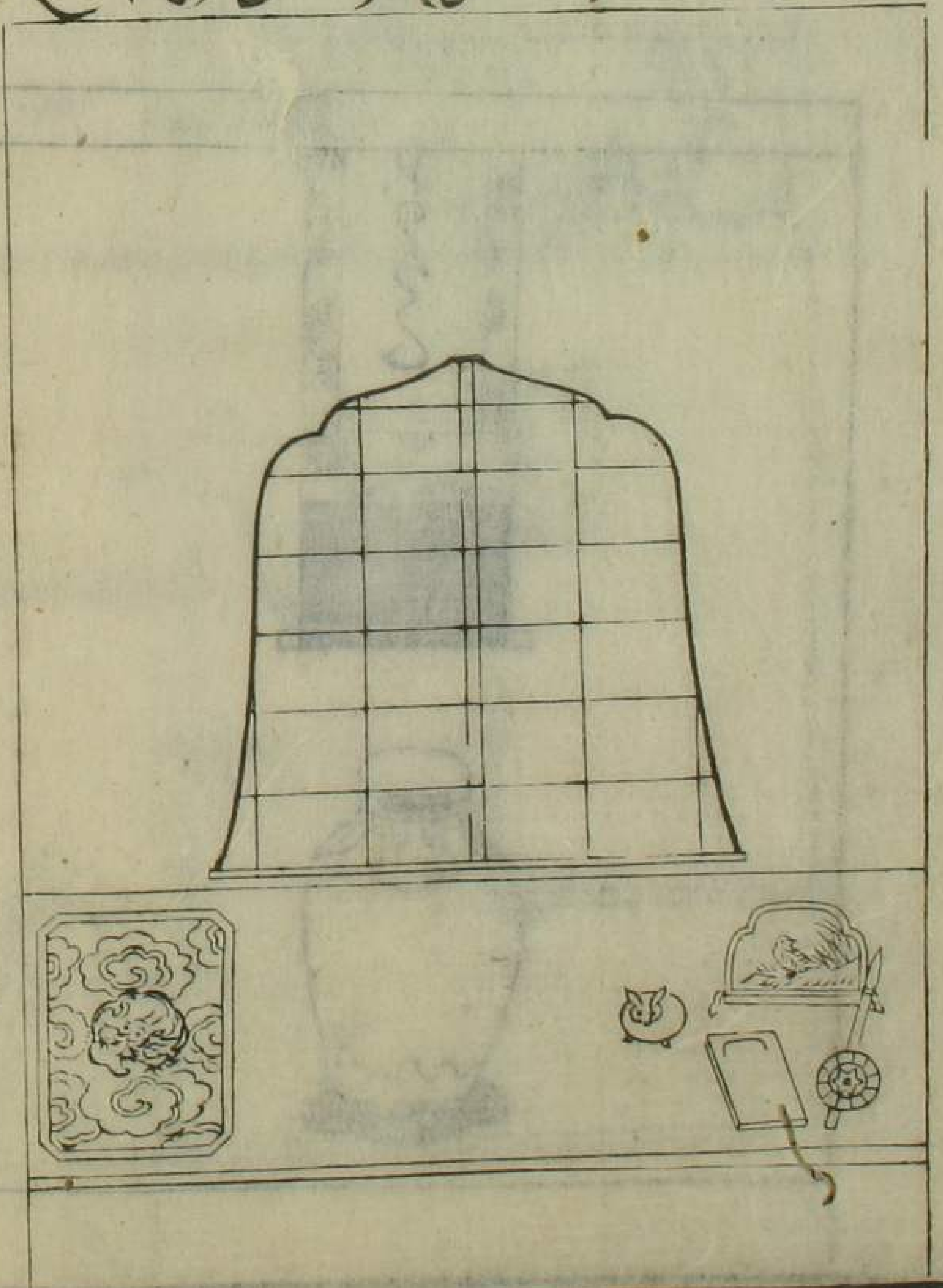
合木棚


仙盞瓶（センサンビン）
塵壷



右之三荘り式法あし
くミ合ゐ合せ風流之
外すもん合よ荘り
なすきといふ事ゐ
か柱かくしのあり
猿猴なと図阿ハ宜
こゝにもよし柱
暦といふもはしまえ
竹編板なく寸分長さ二尺二寸巾あり胡粉書之上
かさりに胴筆どもち上げける床飾の様子之

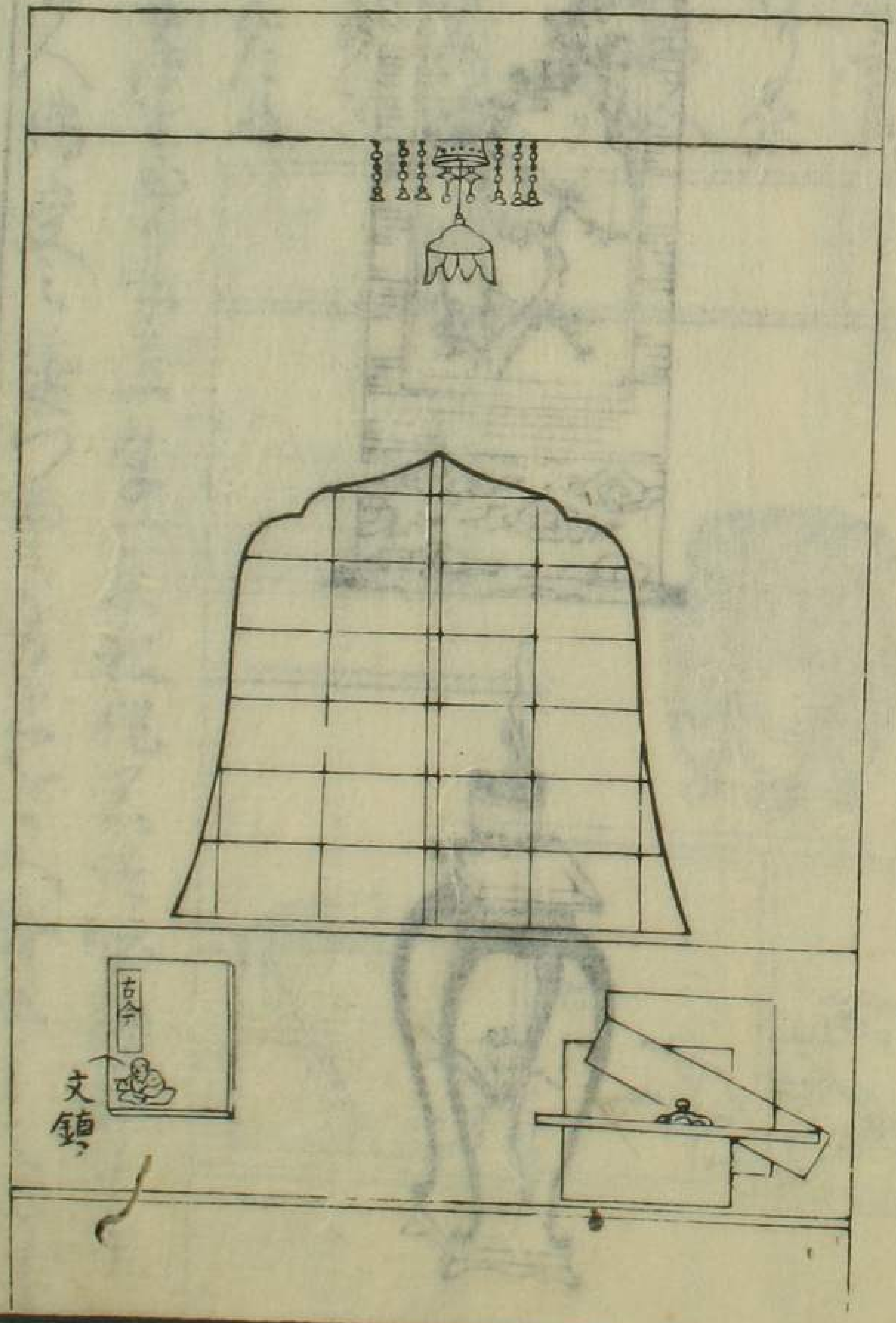
書院床荘り



尾州源敬公

連哥之茶會之時書院床之荘

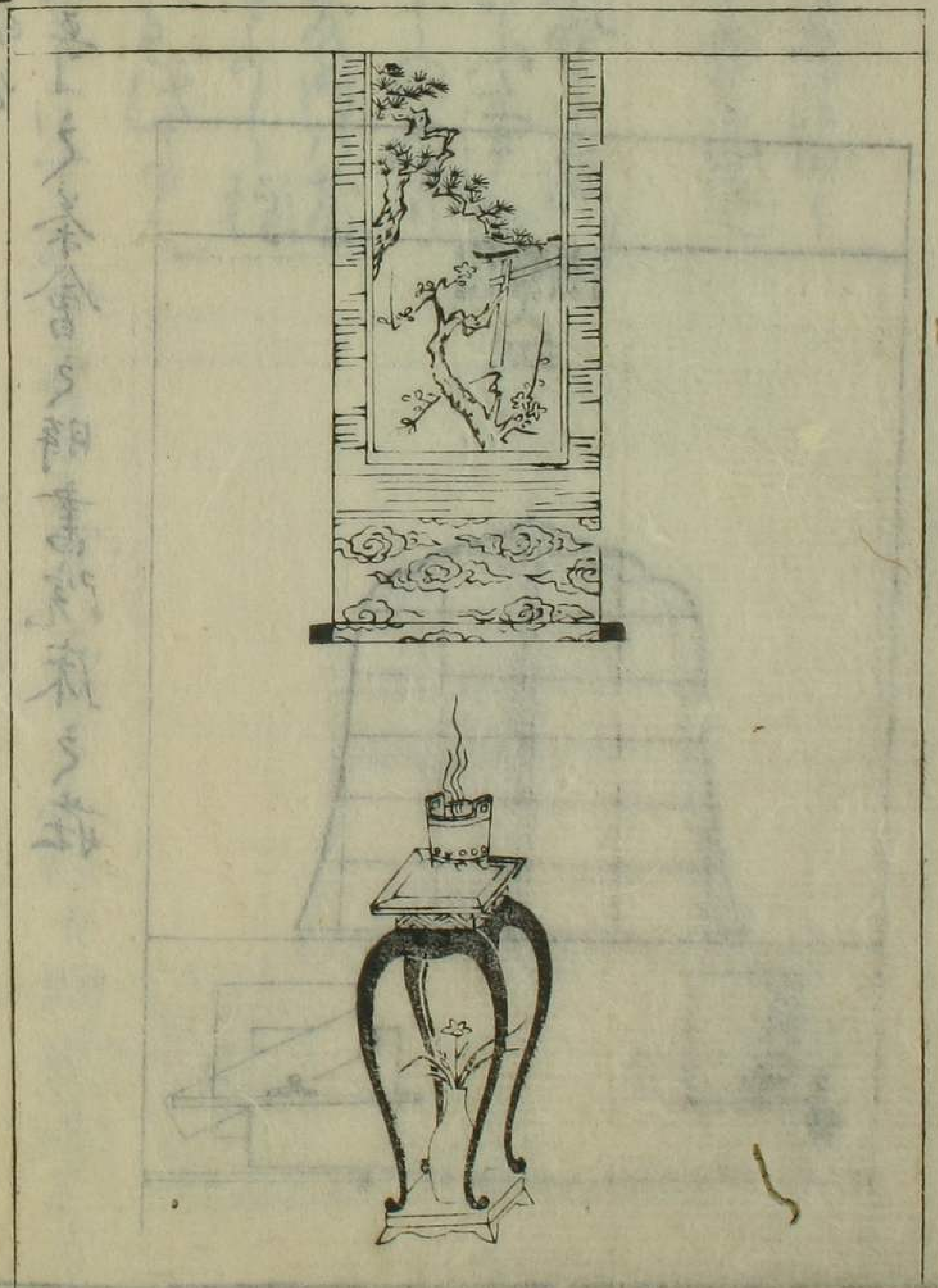
色紙短冊
ケサンノ置合



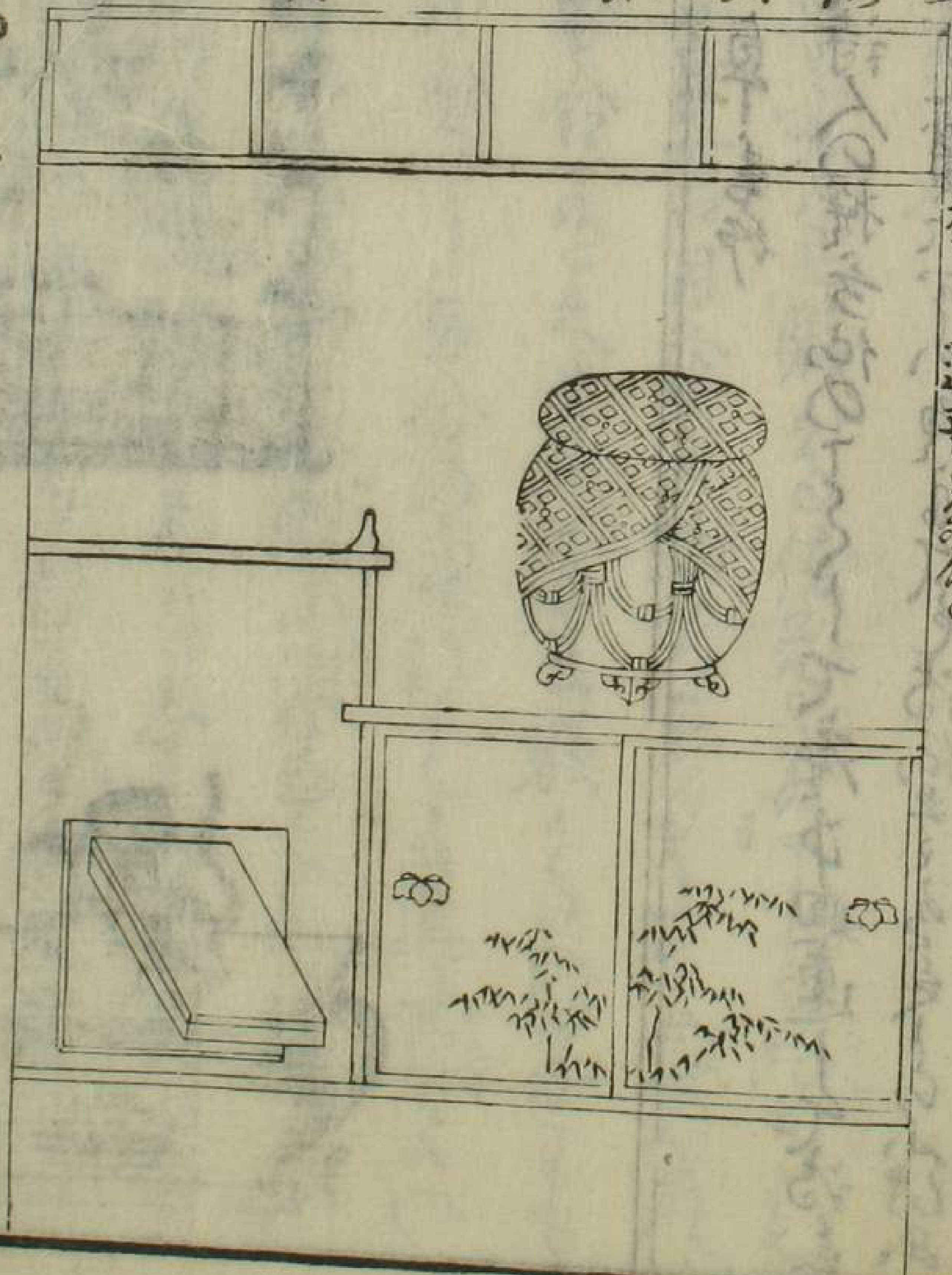
同荘

天神

連哥興りの
間ハ此繪を掛
連哥終後ハ
御影を掛る也

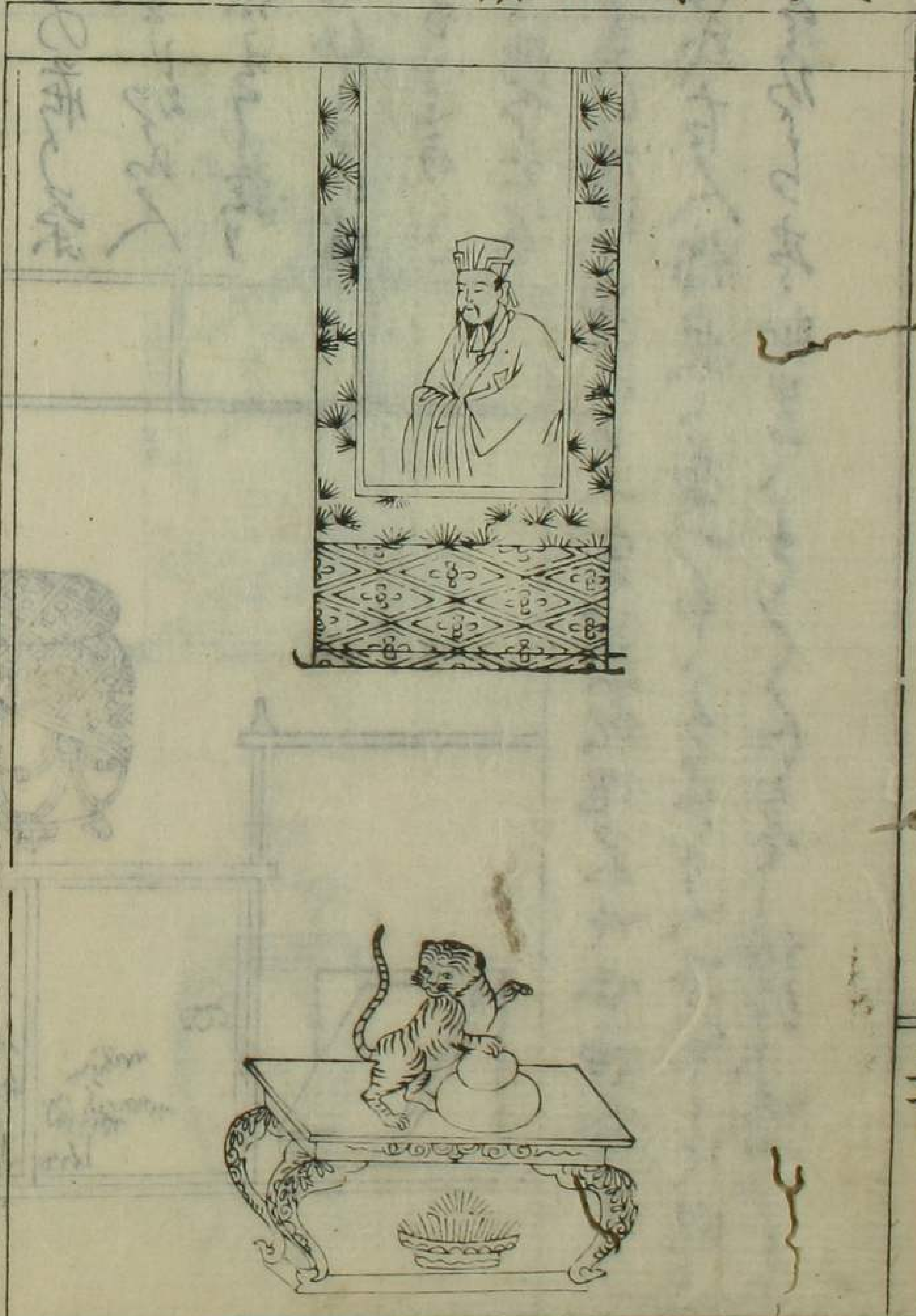


袋棚　連哥茶會



右之品〻の荘りハ尤上人たる人ハ其家の宗匠にも宗旨の上連哥真行草之時の荘り茶道宗匠連中ならぬ人ハ容易に知得なき荘り多く口伝有て秘する事の儀なれバ此ニも述かたき事のみ廣く伝へんため手記として此書に書連ぬる事一字一点私作不加味飾なし皆格式古人伝受を変つめしゆへ事と又吟味して行あらば其事ならざる事とて補弼(わつこう)味わし

源敬公にして
正意ハ[illegible]
ら仰付ル[illegible]
書院の床
え[illegible]
の時ハ三聖人
の絵掛ものハ
孔子の像朱
子[illegible]の像
詩の時ハ三[illegible]
し時ハ李白



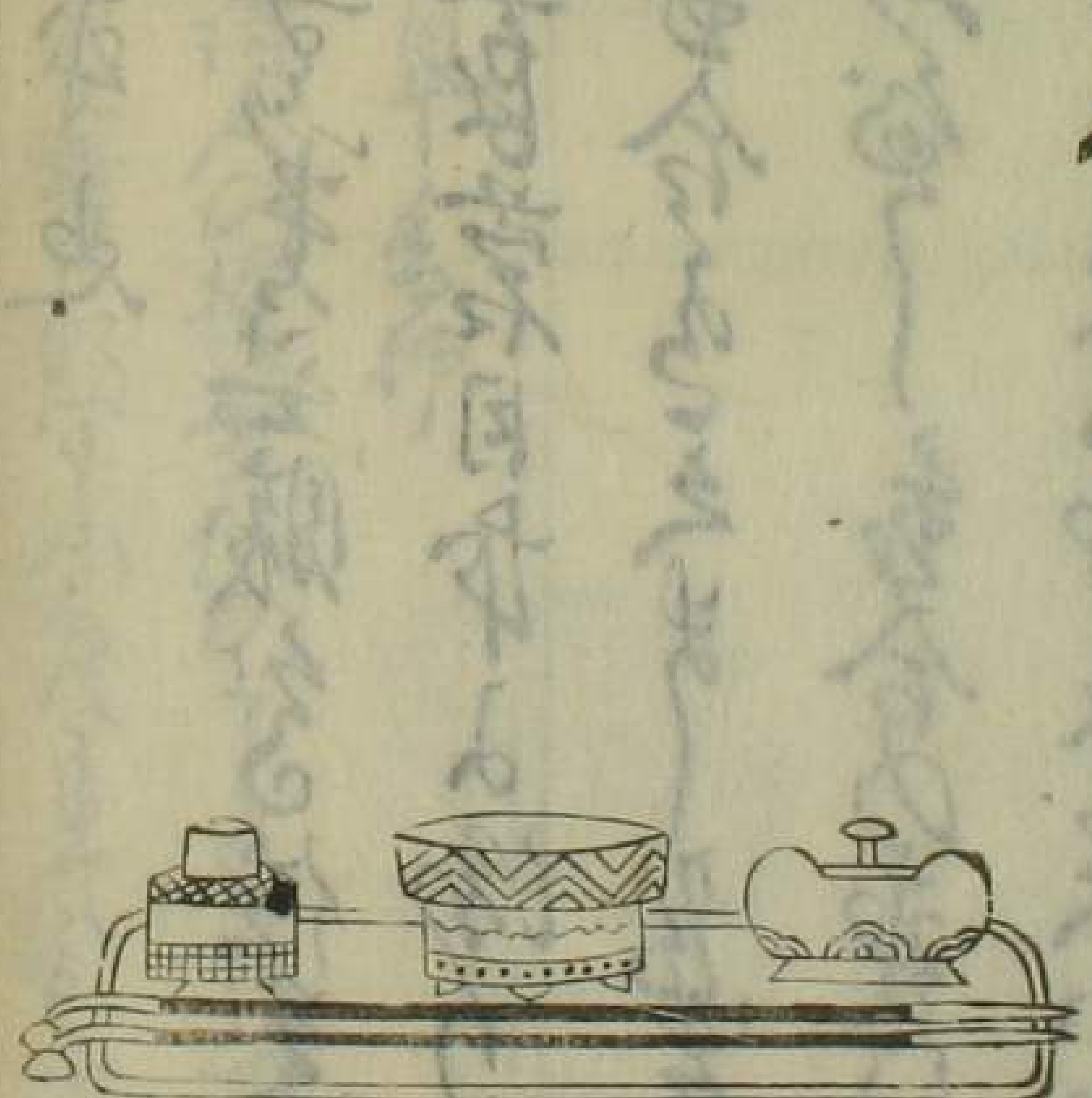
杜氏か像の絵掛てよし　卓　香炉

一石川丈山詩仙堂とて詩人の擬方仙のごとくして座中廻連して詩会の事を定む或時此義を讃に写小庵にても詩仙堂をなすこともよしとなり

これ等も一ツ乃格式也

一或時莨菪（たばこ）盆（ぼん）ハ昔シ[illegible]よる佐益あるを好て煙（えん）をてあそふといへとも莨菪日本に渡りしも慶長中（けいちやう）なれハ定る法もなきまゝ茶会に用ひまし然らハ類なきの象とも[illegible]あれハ[illegible]盆（ぼん）ハ茶会の式法もなきや否（いなや）これ不審（ふしん）なれハ於京小笠原氏御家於小池甚之丞に伺ふ[illegible]甚之丞委細（いさい）御聞あり御返答茶合あらハ此中に[illegible]古例（こけい）之定礼ある事なしとれ不審もよしとされとも甚之丞申上るハ古例定礼なき儀ハ[illegible]理も無御座候て[illegible]甚之丞それより茶会[illegible]新（しん）[illegible]の[illegible]

是ぞ礼式正しく如此藝道の道ハ香道茶道合しく其つとめ同じく火入ハ香炉にて入かへり炭灰吹ハ焼香入となせるハ香箱のあり而よ何も香合て遊花ありけるす依而是作の趣すくる香合ハ古礼の法とん定むと備まへあるよし諸の事一ゟ多く秘蜜礼式を探知あるべし



茶礼湯定組並目案内亭主より支度心得ある事并茶の湯あらまし第一也

一　年始ハ不及云ニ夫より十月口切又三月末炉の名残次よ八月風炉の名残なとて数寄を好むと角又六月まへ茶内の時をえらび定日をさだめて其前日よりよく約束を定め数寄屋囲の内路次のあらまし其日まへより二日まへよりことよく掃除すべしさて炉中炭をおろせ釜を掛中さかり灰迄能く煙あるべし其上にて茶入を飾あらせるしかるべしけるびくん縁要し

一　二三日まへ茶挽置べしむかしはよりつるまへも挽

釜之急に仕かけ茶をまつらしくうすの香してあし
きれ一度ちおよ拭也茶入も袱紗して茶はきれいにさ
ぬれ茶入の内ゆすてよくよく洗てかしかさして茶を入るゑ
茶巾釜帛紗に入ゆへつけ二三度んをあくるめ又ふ吹さ
し茶わんにふかりなげかけさすりしてよしそのかはに茶碗
なさしおゐて西香なる故拭に湯のかる置つうち乱る宜之
一當日のまへ日に炭組合て釜之炭かはに置五寸も添
る炭は丈夫をあるへし割炭帰炭胴炭点丸似炭
灰器之安く仕継釜事也
一當日早天に湯地拭んのさうちとてるものすに落葉
なくあるやとみ合へしむ庭者園の又掃除のさらじ

子前よりあるべし釜の茶の湯かくともかし前数寄
なるべき茶又ちらさうぢあるべし
一釜の茶の湯かかるむ前早く炭丸へ炭入組火箸鐶
入釜かの前押に香羽箒香箱は囲の押に置く
一同勝手共前に釜へ入れ仕舞して炉に仕掛釜
一勝手の前炭丸あけ釜取は炭取に灰を入水次箱包
丸入釜之炭取の火をとあそこあれ炭取に灰を入置よ
ゐまき灰捞釜へしあそれ灰は炭取手へ組
一帛巾茶紙勝手羽箒灰流釜門行口よ置六七分
ぬ前入上よ蓋置釜帛紗丸添釜
一客あと一時よも此る時よ割炭添炭よくゆるよおこ

し火箸を釣へ入よきころのあいを炭の元へぬれさせかけ釜を掛合と其時よろしの炭を炉へ又六分ほど入細炭を一ツ二ツほどに加へ釜を掛け釜は下火をよくおこしみな能焼きへしてとめさせまするなり

一花桶なりたまへ手を会も文枝葉入用の所斗すゞかもよくきれへゆるりとよくすゝぎ先揚ミにて下だましく花のたゝかきめやしにて少し度して則床花へ出まして仕組釜べし花入も能く拭役むべし

一花入とおとこまゝいうる抜んでよくらけす板敷下よりくめぐひ淡釜也

一客待合を其時門路へ水をうち其のうち公へ湯七八分入下火の上へかけ囲一遍んまじまでそろ焼して躙あがりの戸をゆびかゝれど少明けて待也

一床には中立花かけ掛物ひつこみ置にやうれ見合かけ釜なりかけ掛物は南に物数寄

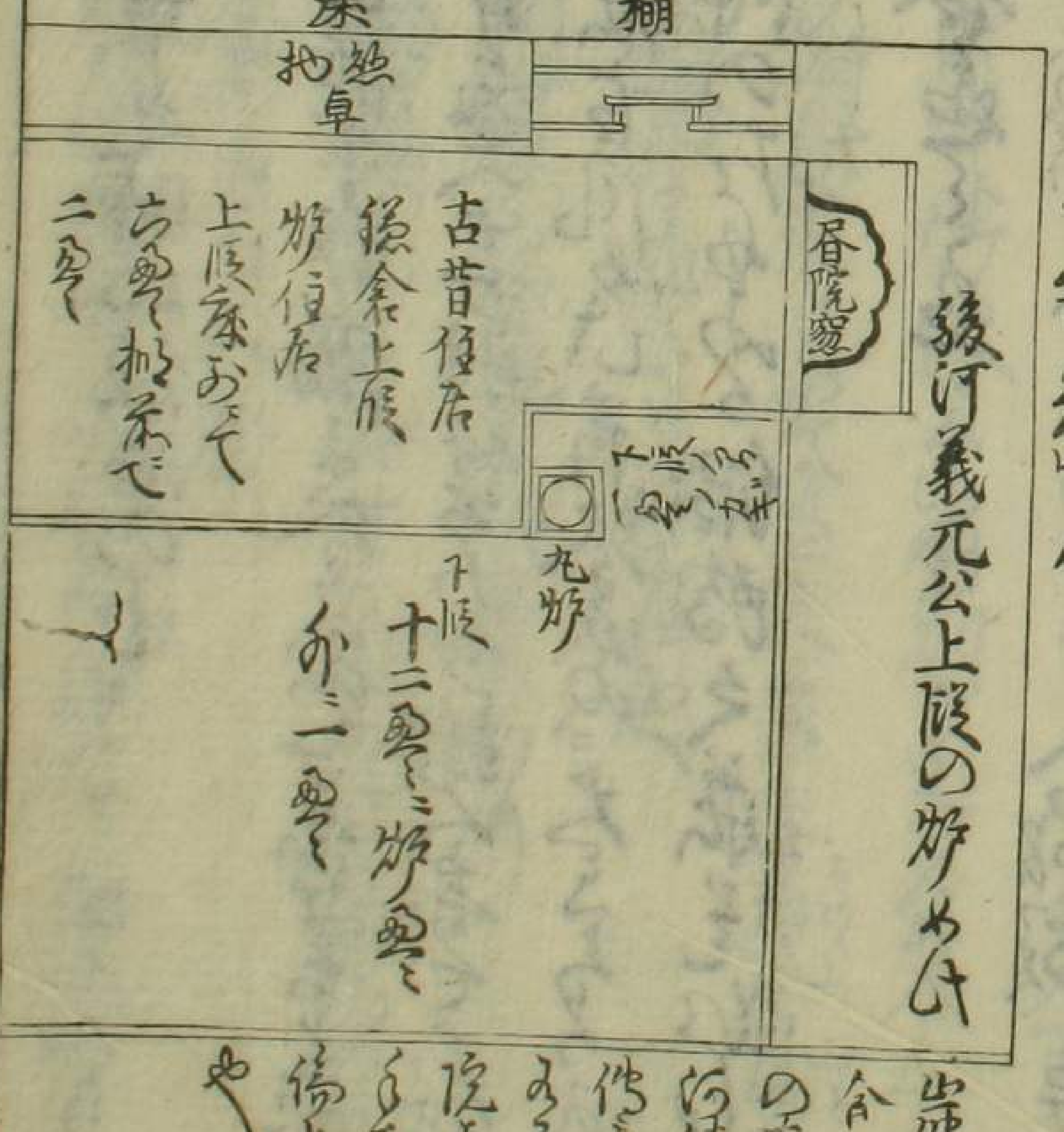
一板揚子の料理は炭のあとよりかけ膳は小見合ト付覚北窓よりみなの客をも給ひてうち向ては中くらゐ亭主出向ふへこれを付木綿の手拭の白布をたゝよく入かうち戸をところへくるひして客と給ふ心得あけ今日は湯お茶とふ客の相客承をへ取付入らぬよふに云てたのとかたのほ掛物出しくりのかりきる客井ざつとぬぐひろのぬぐふ肩まをみんなうしき往来と此間まゝけ申まくおいとこ戸

柄少し丸かゝるを明けて内へ入也

一其まゝ置て客膝に入とのくさを入合早々に出す時勝手にておくる也一灰去器へ入灰すくひ添炭斗炭取より炉襖壺合茶道口に居て客の退座を見合て勝手へ第みておき茶道口の勝手をひき忘れ給へるりひと炉炭茶たりと改めて先一礼して柄内の挨拶一ツ二ツさいとふかしまひして又勝手へ入ぬるを待てさきに箪笥紙箱中へ入炭取持出去種も囲へ入おくすえて炭するに炭仕舞たまへるは火香箱をいふからに勝手へ入ぬ飾白の上に釜悦蓋壺を添持出釜人なほ仕舞掘もたる記とてく

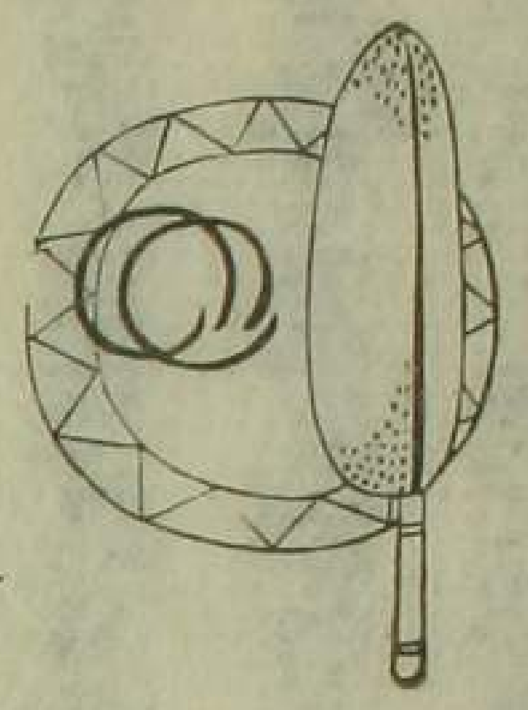
一右之通炭仕舞釜をかけ炭斗もちて茶道口に勝手へ出してあとよりいふ退出茶道勝手へ入ふすまをたてゝ今え出し釜の口紙まで勝手へ入て各々料理勝手より可出事と云ゝ仕舞も委細聞書に在

炭之次第


駿河義元公上段の炉の図
床
棚
地
卓
書院窓
古昔住居
猿楽上段
炉住居
上段床おゐて
六畳て拵茶で
二畳
九炉
下段
十二畳に炉
外に一畳
一畳半かまち

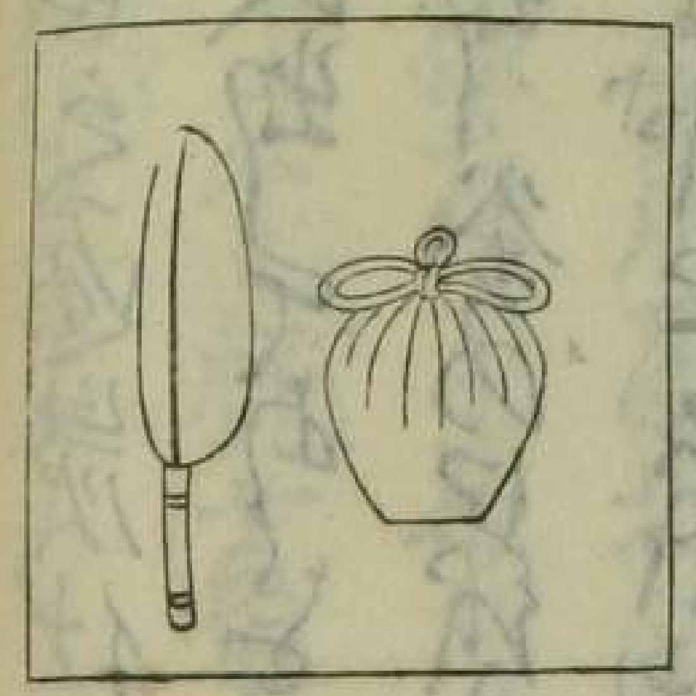
炭斗茶会と紹鴎の茶師駿河の今川殿の時代の器ある絵本にも候ようび手お入分錺上古風也

右上段台子ハ三代將軍之時の台子の圖



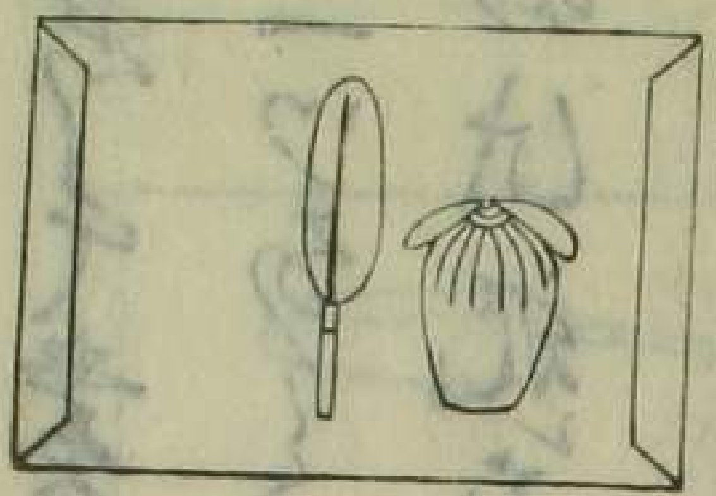
上段下炉脇ニ香盆と並其上ニ鐶
中段へ香羽箒ハ小ぶり鐶へ香をたき其の
莊古風なれハ肩衝茶入ニ大さる乃之代
時のたしなみ紹鷗之莊を以ゆかし

炭莊鐶羽箒香合並之圖



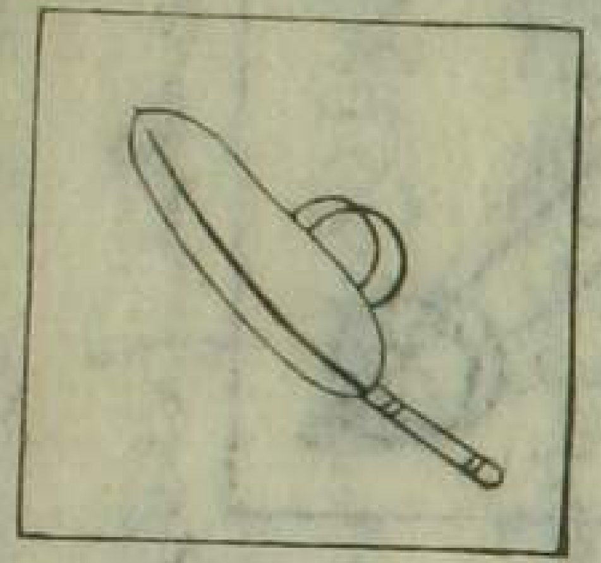
振出の又ハ古き茶入綴備ある茶
入而宗匠之茶入ある上ニ飾るなる人
為猶も角板ニ出底ニ莊ハ二番大
二番大ニすもめけ

小及臺上棚 但角板ニてもよし香合可也



新茶入ハ必錦入香て香合と中ニ並小及臺上
棚の茶入ハ宗匠加賀の肥前相よし新茶入ハ茶入
名物道拙者左右ハ右きにをもらぬ茶入丁寧あらハ
棗ニ此也て沙汰の時ハ別ニ茶入ニ付て沙汰
茶の湯の時ハ莊り置てまた其上にて其底ニ此器
それ名物の内ニ成る珍器也

定例何の宗匠にも此莊あり
右羽角板ニ鐶と香合する時ハ角のつまま
をかさねるちらし置



又云たねハ此香合と引く鐶で角のつりまへ

向ハ香炉とかハすぢかへて香ハ置かるゝ也

して可見

定例

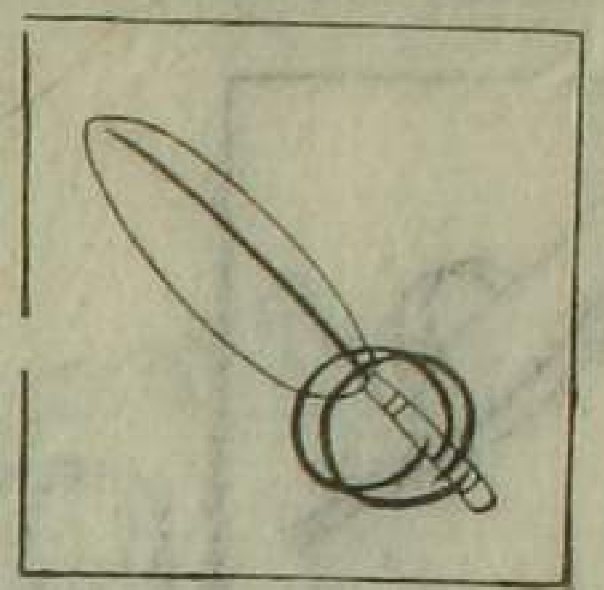
奈良箒右にさうらう箒ハ茶之湯人高人

拵紙形ハまく云ふらくハ人あり箒ハ羽の拵

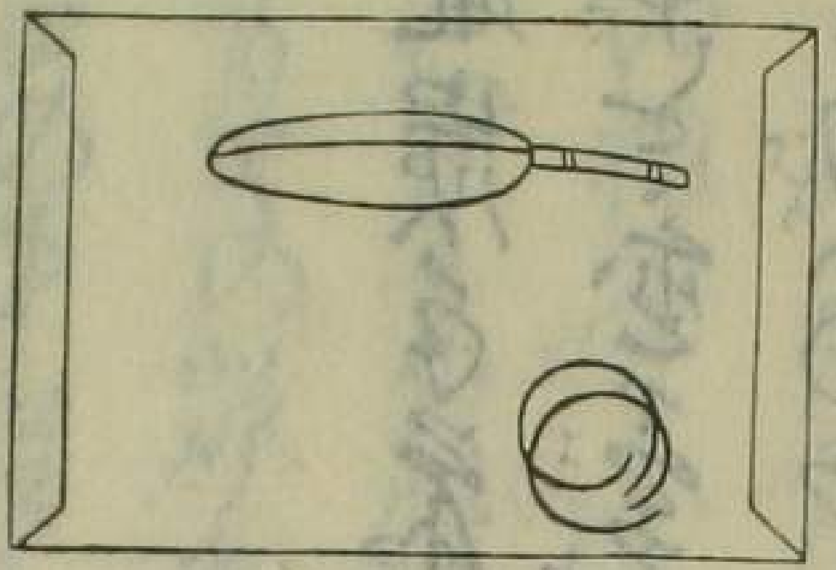
此上に如此花に行を宗匠付に也

扨て賞翫の書名羽箒茶入まて拵の上に香也

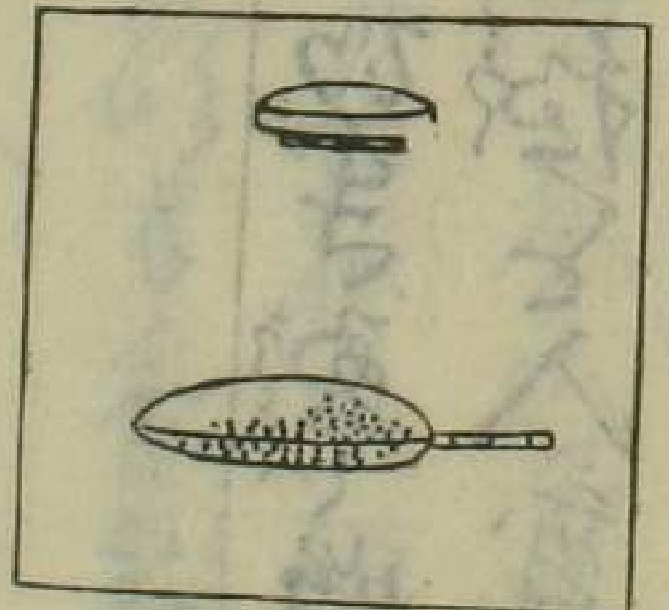
二ツあるハ賞翫大切のものなるハ後盛まても拵まてを



如此記之



賞翫の羽箒何より
なるを付灰盛にて
も拵ふても如此
箒ハ香合とこよ
家の箒ニ入合ある
香拵早なり



前拵二ツともニ賞翫
のものあるハ如此
香

但香箸の内へを
花りよハ伽羅文
香し

右之香合之外ハ珠光紹鷗の好ミ此外にも多く千代

宗匠方家の好ミ香合あれとも其の時に無之気てん

作拵数寄者多くあるに其さ張香合花拵とある宗匠

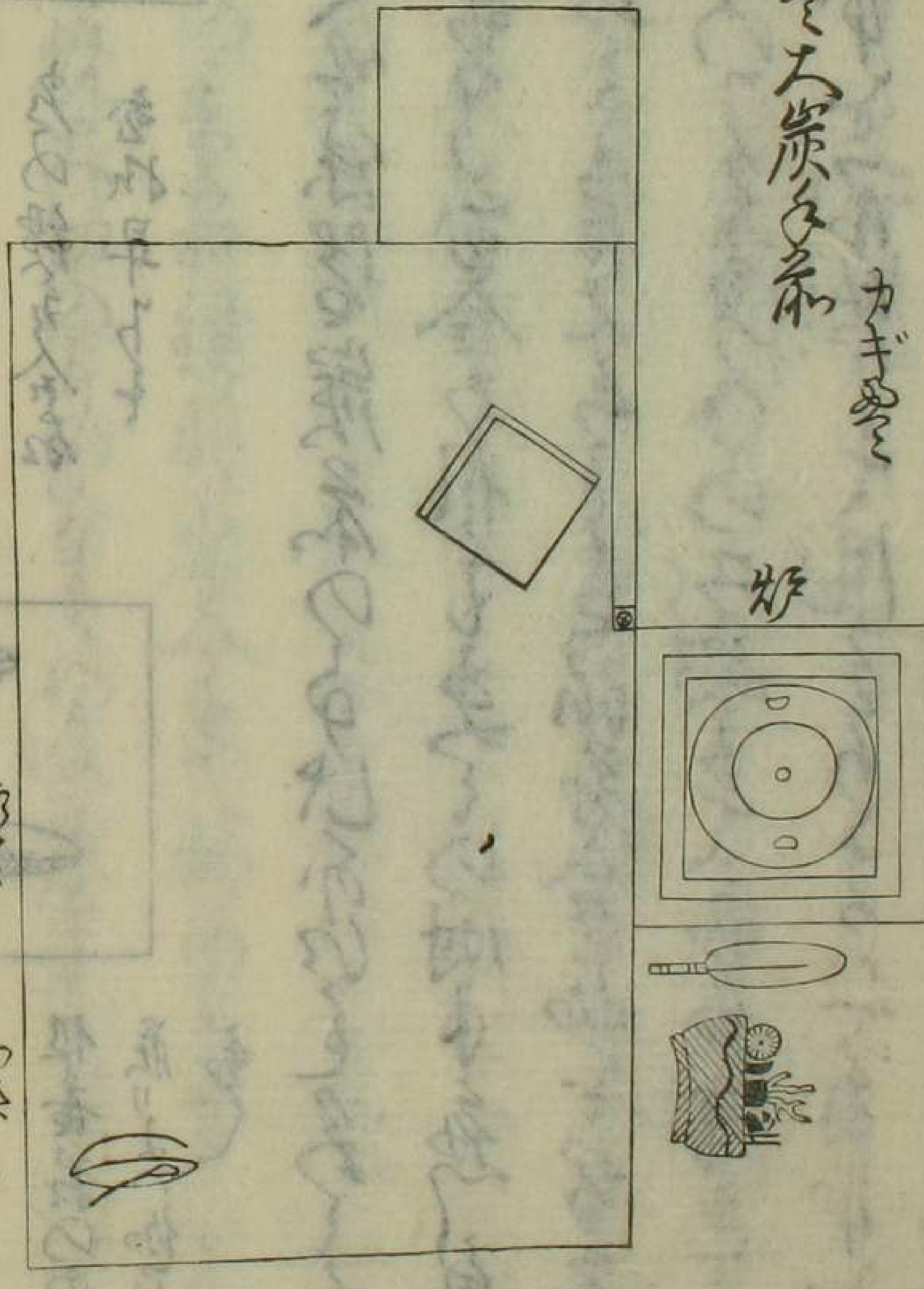
上手の気てんにて多くの工夫にて香合猪もとろ

りやうてうなとゝ相談して用ゆる物ハ一ツ目あたと失

ひくる拵数寄者ハ目つきの茶事に付古人宗匠の

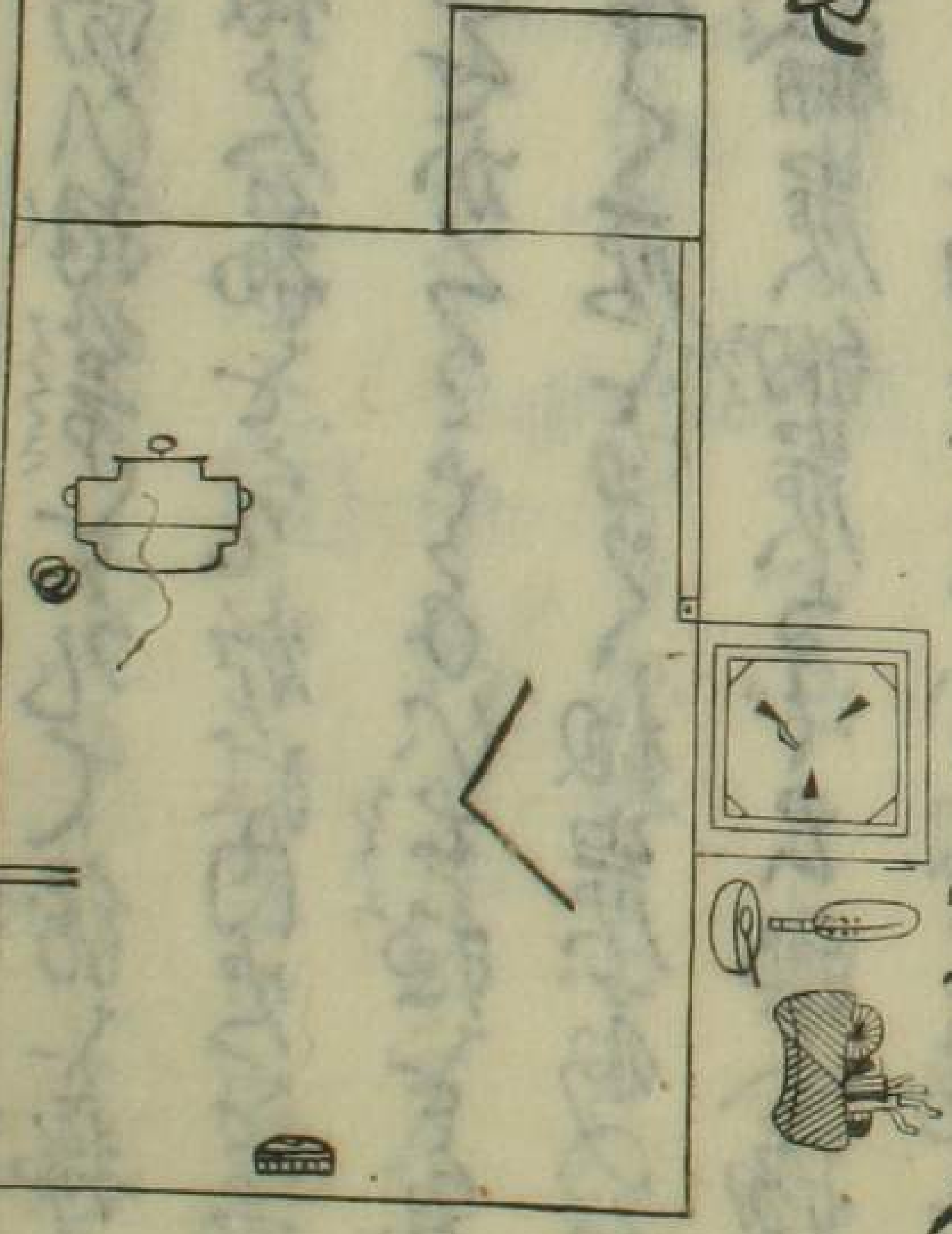
此味ミ棚ともに能見習ふ習事有る者也

三畳之炭手前



一此炭手前ハ右之図之通かぎ畳ニ而炉脇へ炭斗羽箒と釜ニ茶杓のそて付へ火箸と入座之我居ならう不ハ向ふのかぎ畳ハ此万年中を開付あめて大円の炉お

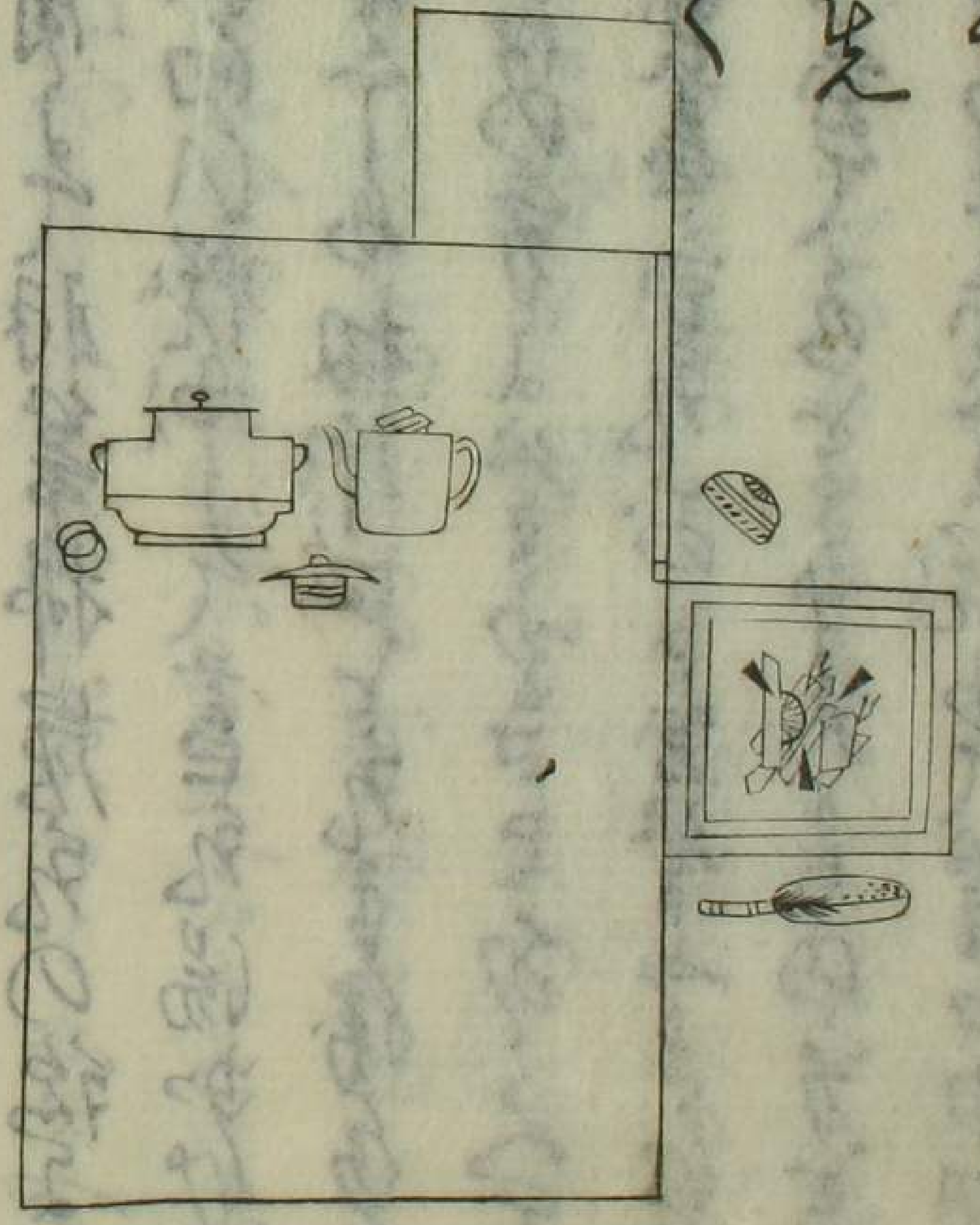
居る也茶杓之口をハ右之ろくを内へ入るよふにむくうしてん而柄杓ハ小向にハ帛巾と右而し釜の蓋をとりのけよくさとおきあ羽箒とりて釜の蓋摺ハ羽箒のせんをとりしりての炉縁へ炭元よ羽置ハ香合をとり出し茶道口の中程よ炭斗を柄杓と釜ニかけて敷紙を丸出し客ニ而七炭よ三柄杓を揚茶後居まり釜を三分二畳大の客へすゝせ鐶をはづし



此客の所に釜又炉に向ひ羽箒を取て縁を掃ふ附たり
云く炭の流となる胴炭火箸を取炉の内炭を吉て湯の
かへりに火箸を逆にしてかゝらぬ様に五徳を取炉縁
の左の方へおきて炉中をよく灰とさらへ胴炭灰器の
下に釜胴炭を下し管炭輪炭細炭など左の縁へ添ふ枝炭
を揃二ツ取て指先をみなくも向へむけても釜胴火箸を取炭丸
の内炭を炉の内にくべ合せ其外炭釜へよせよくに炭の
口より置方にはかやうに管炭は左炭をまた釜又口より
見て左右よりかね相にをりよくて点をとれ其炭の仕向
あけて其もち管炭をと炭のさしくさ火のおくらつる
ともにとりに合釜へ其附客炭寝ところの表紙とれえ

亭主お口よりかく香箱のありなしとも客へ向く出ス
其外八根を客方へ向て出し胴炭道口内右五徳出し炭取
を出し胴炭羽箒にて縁をふきさて次に右の縁とをかへ座
敷におきさ炉の角まで羽箒掃炭丸の縁に釜を
其もち居替り客に向ひ帛紗にて蓋取湯かげんをみ
るかゆきましハ蓋紙出さしめ胴炭口にと取に勝手へ入て
水指の上に蓋を釜口の方に釜置向さは蓋取て釜持
出釜かへて釜蓋釜の方に釜置向さにて蓋
を取口の蓋とりて釜て右とさすあたりの方を揃て
水指へくべ胴炭口より釜を帛紗にて釜白巾ひ釜の
蓋をとよく中にてめぐり蓋しめつきまゝとたまてお

ゆへ釜の由ほりとあらふ柄杓仕舞片口勝手へ出し鐶を
け中柱のところへよせ
炉ハ向ひ釜を懸先
炭紙ふところへ入る

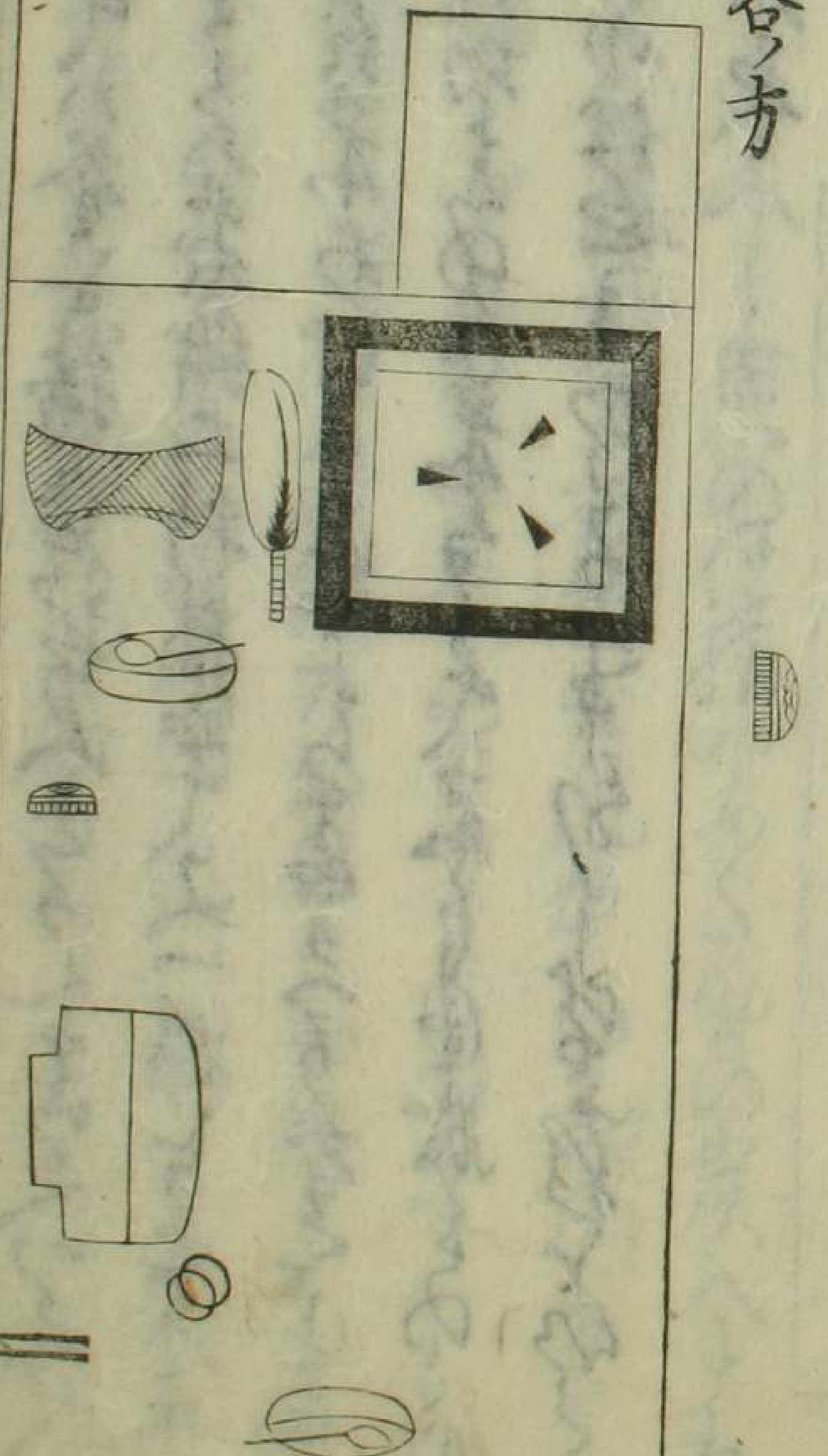


釜蓋とる時縁と同鐶をはづし鐶ハ左よ持て帛紗にて
大目の内ならハ勝手へ入る柄杓又出し悦巾も炉
縁をぬらさぬやうに仕のこして後に釜のふたと切て置

切とはなりかけ置事尤宗易の香合と置
ども其て入る時一礼して柄杓入させ申まくらにそてつぎ
炉耕理勝手に付て出し挨拶して置なりを出て
ゑむらく二重に大かたに敷合羽

一 悪しき大炭に茶合器

客ノ方



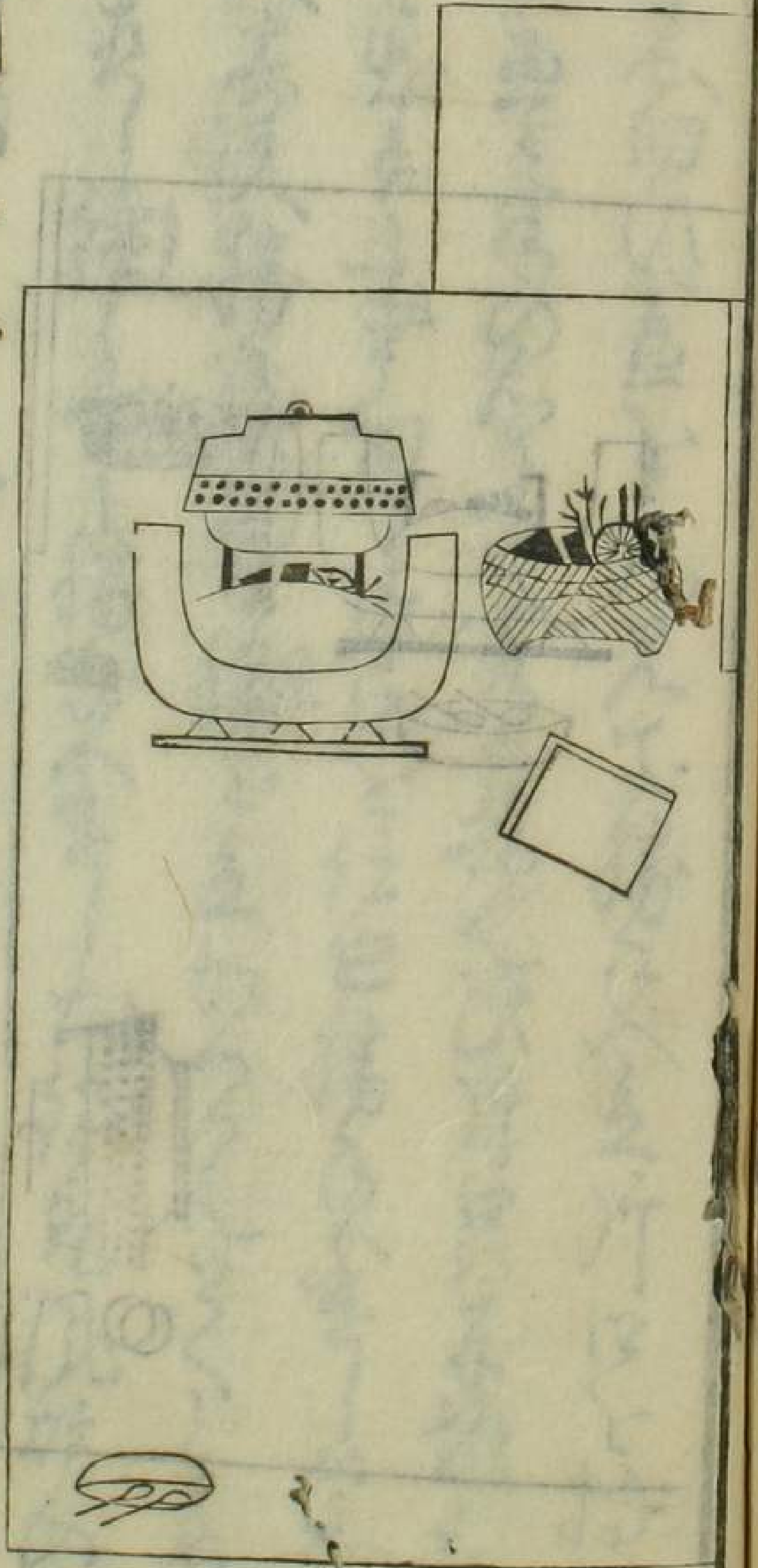
一右畢て出畢てハ釜を揚る方へよせ置又つくて
を茶お手持くるハ袋紙二枚指出て又一枚を茶入口
角ノ方に袋ニ茶わんあけ候て茶ちゟ茶入つり釜とと壺
るり一畢て手ハ切ものハ茶ゟ茶を置て取り里懐をのく心
ぬもあるべし此の仕廻にかゝる手前ハ皆茶とゆく
おしきろふ也

風炉の炭に茶（付り風炉の灰ふくさ灰ふて細ん心得 かく切に仕舞の所に依る）

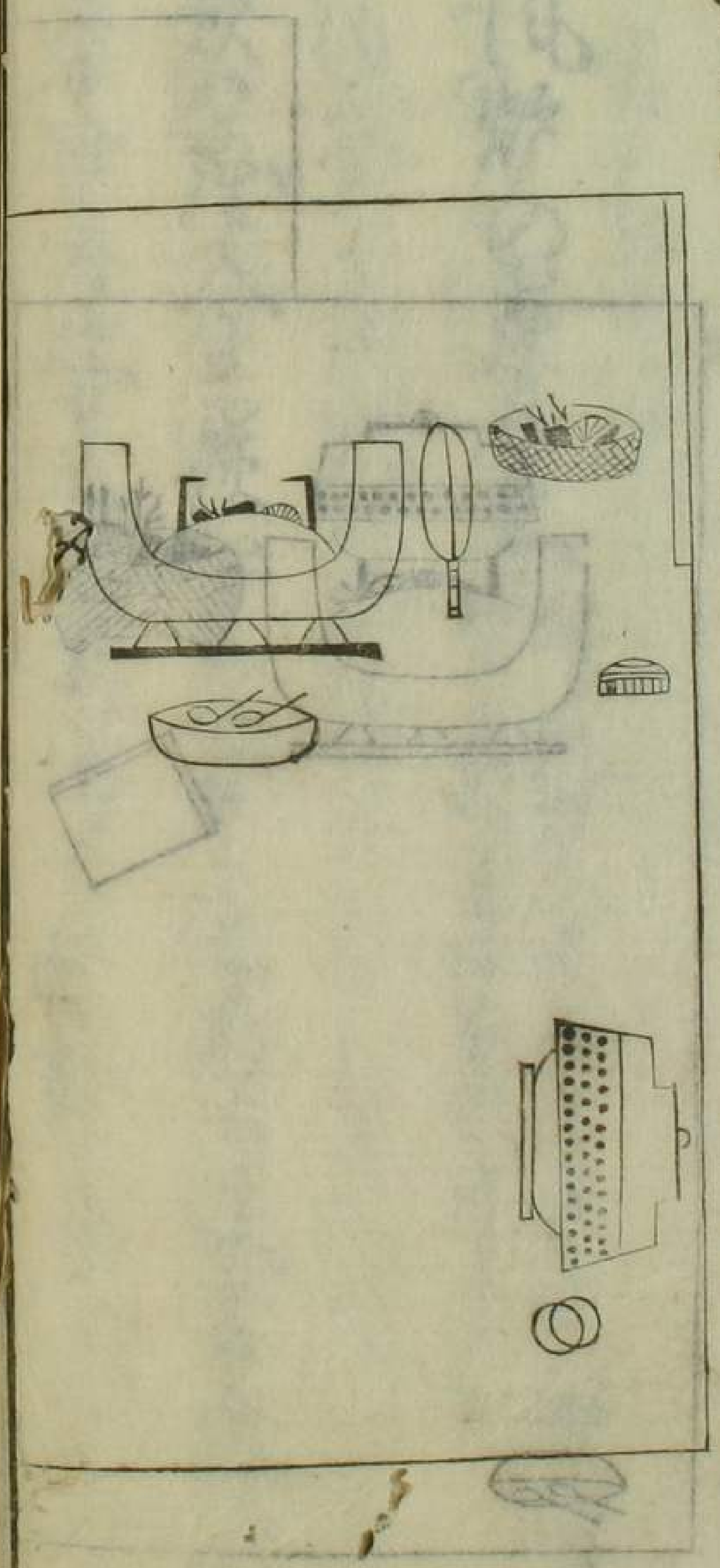
一風炉の炭ハ座（ざ）入ニ炭する事もあり又茶席出て
洒の中半（あうで）ニする事も有り

客方

大形ハ洒の内ニすへし炭の仕様ハふくさ畢の炭入ニ着
羽揃ちろ火箸羽箒を釜指出風炉の左右中央に置
居くり支種紙もち茶釜の蓋ちめ羽箒にて
蓋を拂ひ小釜をはんけ袋紙引而を釜持主の方
乃膝（ひざ）をとて釜をおくる亭主の方へ向ひ引出しまへ中ふ
釜又居くり羽箒ニ而風炉を拂ひふろへくよ而風



炉の時ハ手前に灰掠まて台子の時への灰と羽箒の事
と並て柄杓とハかさね仕舞の一灰とりふたほまする也
右仕舞ふすると釜へ寄せ置炭を丸入火箸を取て
炭とともに持出して風炉の炭ハ丸く入しても今ハなしと
右香合炭仕舞少く置鐶へ仕舞ふ炉縁と高く鐶へ
置し香合ハ出まするりか鐶しろ時出まま於炉段の前へ



置し釜蓋へ向ハ蓋を取見て鐶子へ立行日と持出る
ときさは一度ときのけてるハ指くは行日ハ本地に立
灰蓋釜を出まて手前行日と仕舞鐶子へ置し釜を風
炉のさうへ寄る又鐶子の方膝を立かけるくいとる程て
釜の鐶を出し鐶や鐶子へ置し大鐶丸風炉の前
ふくへ置し灰の中をよかろく大鐶鐶子へ置し釜
の蓋丸けて香合丸ふ料理ハ鐶子ハ出ると又酒
の内ろまへ其のまゝ入也

一風炉の炭ハ釜炭小置炭二つと置炭をとろこさ
しておるまし

一風炉の炭ハ釜の底へつくへて向をみえとさぬやうにま

を知らん常の炭ハ釜の底へ付くことを嫌ふべし風炉計ハ少しけう賞翫也

大こ無毬子長板風炉此炭の据に何も正面中ほどの炊縁ハ中程より下ニ据ル也

炭寸法

一　臺炭長さ七寸小口ハ一寸八分より二寸まで胴炭とも云

一　おき炭長サ四寸小口ハ二寸二分或ハ二分

一　割炭長一握四寸五分又ハ四寸三分五分或ハ二寸二寸又分二寸一寸五分之分ニ割

一　輪炭長サ一寸めてを八分までもくさすまへ一寸五分

一　細炭ハ七寸八寸五寸とも丸炭又割ても

一　中炭割五寸六分

一　割毬ハ則臺大炭を二寸五分の切口めて用此時ハ輪炭不入

風炉炭の寸法

一　長サ三寸五分二寸めてを毬小口一寸一寸二分まで割臺の小口一寸八分又五分迄寸

一　輪炭一寸五分廣ニ不依く二寸めてを

炉灰五法の事

一　角を切に角より二寸六分ハ古法也一寸八分に切てよし肉もりてりと角をハまろく外ハそりかへ内の角ハ丸くてんとさハよくべし但件の灰掃又はも又或縦に細路

此丸炉を利休角炉に改られし時職人のもとにて灰の角を切丸炉のかたに用ひましく名共古老に丸炉を角炉も有之と傳ふ慥成證拠を見ざる之

一 五徳ハ灰より爪を三寸五分内にたほく割とうちらのてくるへ炉の内くらへ此内ハ二寸八分にすへし肩釜縁の内ハ釜の底より二寸八分鐶口釜ハ炉縁ゟ八分上

一 五徳入焼口炉縁より七分下て据炉の柄一寸五分之めら柄より五徳と又角釜縁ハ炉縁とひつよふかへら柄よりあかりまして炉中の柄下より低く抜ても

風炉五徳法柄同土器寸法

一 五徳の爪より風炉の甲迄二寸六分但釜に寄べし

五徳より土器のふちより上一寸五分

一 土器の灰より上出る所四分灰かけ柄土器のふちのうち柄より内より灰ふかくして宜也

一 土器並に五徳の角と土器此内かどく灰のかくくかくらなすく○あひ也

一 灰の口伝一方ハ山三ツすつ内ハ一方ハ四ツ谷山二ツかつハ一方ハ谷三ツ此灰の事秘事小炉風炉ハ向をそる○うけかち菊の柄にすつ大キ成風炉ハうしろふちのきと立て候る

一 風炉の灰ハ炭の出るやうに鋤より掻並べ其掻れ灰をかきあらせて茶をとしれてかるい宜也

一臺子の風炉ハ古銅の釜とりて鉄ても紙を○ろくる
是も火ハ焼口の風炉の時ハ如此

釜居紙寸法

一長サ四寸九分よこ三寸六分如此但平常の時ハ紙を用
紙数十文六枚重てよし

炭組様

一臺炭組ハ割炭胴炭とて炭鐶炭輪炭白炭なとを
組主人炭取の前ハ向とかく其外ハ他分の用也
羽箒鐶火箸香合をおくの

白炭組様

一圍炉裏にてハ白炭の見所方を向へなしてもとをおへ

すべし風炉ハ白炭を出さず落してもとを向ふへ引くて
おく也

炭乃去嫌

一十文字ちかく輪炭よこにかさね割炭をうつむけ
けらく又灰をまきむ又輪炭のうへ入りの炭をかさね
ます悪し

客炭取の内の法式

一客ノ炭取ほ置の内ハ胴炭わろく又ハ八寸の長折ふくさ
てよし但法の紙を八寸よ敷之上に炭をね出さ園の
内へかくさ一所とおへ入るがよし亭主炭をとりて目
おく土風を炉の向ふに並べ長出し者ありて一所へよせ極意

丸ほてとらひ丸去田へ入るゝをのおとの一灰出来飛ぬて
鐶へさはらぬやうに高縁を迄

　客炭へ移てすゝむ

一幌巾鐶（きゑんとく）ほまさと炭丸ね大圓へ入る之炭ほおくる
炭同事おお相双（あひさう）よ違（ちがい）ゐ計之高る互も入れ魁（さくさく）ふ一炭を
防くへしと云附永掛は係仙高る色の仙炭と一寸と守附
花形を強く西堂の附を瓶よ乃く湯堂へ仙身分を

一わら峯（わげ）とよ云高麗仙ぞよ本手瓶中云こその附かさ盈を
とも家幌巾鐶よともと炭丸指高一大圓へ居遣り
うきさ盈さよせ例炭丸を遣炭佐瓶、さま事ぶ会
独の鑑炭る手は掛りて木あゝ出るよ叓つと肉繰の出る

ころくるとおし炭をまろとん宜べし落ち物仙人ぬ
くんと高る云附入るゝもよし

　本地行臼ゝ着

一めり行臼の附ハ蓋釜出ぬと本地行臼よハ蓋釜不又

　臺子一灰の事

一臺子ハ又漣ゐさ旅去整へと釜一灰ハなくて対一灰之出着
ハさもろぬてよしたも出花ともと風し
右乃炭灰の招るの六搬下かろりとハ上と京繰（めぐり）ゐあうれ仙

　菜式湯は完燃（くと）あゝ入ろさ余く

一お多宗の湯をもるむ宗の全く住まつ尽乃繪まのろれ
沸盛よ出記し韵り

一しの〻揃物をさうぢのそうぢやうず ○ 手拭かけ茶
入蔵掃抄ハ不及云路地乃井ゟ宗く蹲の水を
一席入日前きさらいふ迄 ○ 炉中毎日一気を付べし

并茶道具其外入用道具覚

懸物　絵筆　花籠　水次

花生　薄板　釣り花切　くゝ（こゝろえさえ　釘）

炭取　巻香　羽箒　灰杉鍋　灰掬

（新炭　白炭）輪炭　火箸　鐶　（あくぬき灰）

斤口　（蓋置　紙釜）　火田　（永火箸）　蓋抛　釜

（釜茸　帆巾）　（座丸）

風炉　水指　茶入袋　茶巾　茶杓　筒だけ　水

（茶碗　茶筅）

盆　（蓋置　柄杓）　帆巾　ふり拭　綿子羽箒

家具膳　四鉢　食次　湯盆　（こゝし入　手水　湯次）

一　たばこ盆（たばこ入　火入　灰ふき）　きせる（千代）　待合腰掛道具二

一　硯ふた紙　懐紙　糸針　右何同

一　菓子器銘　菓子器菓子袋　鉤けさすけ蓋　紅葉蓋

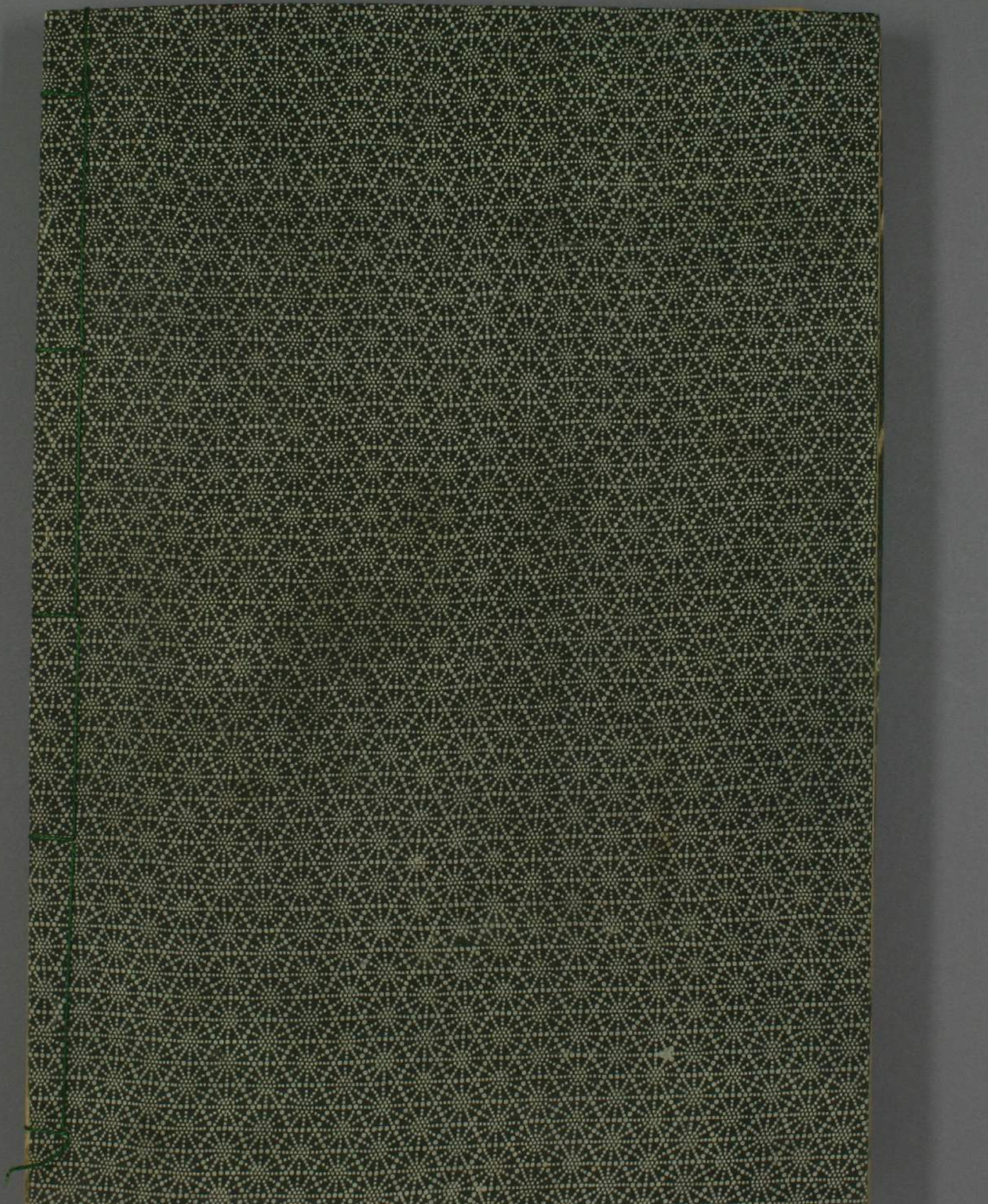
たゝ二階の床くゝ千代清え人ゝ路地人（おり）待合せる

かくし　迄とするる

一東山宗阿弥の路地の纓絡に水ある人の約束よ
りや木板を立申よりぬる鏡とへ客るを
住むく影と映し見る様よ見ら申しと申も人はつ
むかしを鏡ら申すとれはあるに

一廣庭は茶屋数々を合ふは左鏡らに実は方へ乃給ふ
人のらぬ事は常向への家道へは合のよふにて器
紋は是は人し給ふ也別皆家道の作と以体ふ拵へ

茶道筌蹄巻之一終

柳口主